

---

# ブルーベリー&ラズベリー(Blueberry & Raspberry)

徳次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブルーベリー&ラズベリー (Blueberry & Raspberry)

### 【Nコード】

N6654E

### 【作者名】

徳次郎

### 【あらすじ】

初めて女の子から声をかけられた。これが逆ナンってやつか？みんなが遠巻きに眺める名門校の彼女は、身近にいればごく普通の娘だった。◆◆◆ 莊明で知的で奥深い紫里に、僕は困惑したまま、その笑顔につられていた。その裏に隠れたヒミツを知らないまま……。

## 【1】乗り過ごし（前書き）

真っ直ぐな恋愛モノではなく、すこし曲がつているかもしれません  
…。

## 【1】乗り過ごし

人は何時頃に初めて人間の死を目の当たりにするのだろうか。  
言葉を交わし、笑顔を交わした近しい人間が突然いなくなるというのは、どんな感じなのだろう。

幸彦は小学校の時に爺さんが死んだと言っていたし、美咲は中学の時に父親を亡くしている。

実際に身近な人間の死を知らない僕は、そんな話を聞いてもただ気の毒に思うだけで肝心の悲壮感には程遠い。

僕の祖父母は神奈川の住所さえ知らない場所に未だ元気に暮らしているし、父も母も死ぬ気配なんて微塵も無いし、そんな心配もした事はない。

自分の身近に誰かの死が訪れるなんて考えた事も無く、そんな事は成人して大分大人になった頃やってくるのだと思っていた。

そして、その頃になれば人の死は大人として冷静に受け入れ、目を熱くする程度で涙も流さずに自然の摂理である死の順序を受け入れて、ごく冷静な趣で焼香などをするのだと思っていた。

それを知ることが大切だとか、知らないことが無知だとか。

そんな事はどうでもいいのだろうけれど。

今思えば、あの時が始まりだったのだ。

あの時おかしいと思うべきだったのだ。

いや、おかしいと思わなかったわけではない。

あの状況が、自分に訪れるはずなどないのだ。

しかし、そんな事もあるさと自分の直感的危機感を受け流し、日々を送ってしまった。

その真意を疑うべきだったのだ。

僕は日々の暮らしに油断していた。

暇を持て余して燃焼しきれず、ただ日々を不完全に消費するだけの時間が、いろんな判断力をかき消していたのだと思う。

## 【1】 乗り過ごし

モンシロチョウが目の前にふわりと現れて、僕は慌てて首をすくめた。

青葉の香りが風に漂う。

肌寒い風と穏やかに降り注ぐ陽射しに、青々と茂った河原沿いの雑草は、瑞々しい姿で揺れていた。

気がつけば、クローバーとタンポポが小さな土手を埋め尽くしている。

河川が本流から流れ出る場所には水門が在る。

その上の敷地に数本植えられたソメイヨシノの枝には、紅い蕾が目立ち始めていた。

まだ三月下旬だと言うのに、今年の桜は少々早いらしい。

桜が数本並ぶ小さな敷地では、今日も老人たちがゲートボールで賑わっている。

小さな運河を渡って国道を横切ると、友人宅へ向かう為に僕は、駅に続く歩道を自転車で走る。

相変わらず異常に混み入った駅の駐輪場の一面に自転車を無理やり押し込んで、僕は改札に向かって歩いた。

この時、自転車のまま幸彦の家まで行っていれば、何もないうまま時間は過ぎて行ったのだろう。

ただ消費するだけの日々をうつらうつらと堪能して、高校生活の

最後の年度を迎えていたに違いない。

駐輪場と駅との間に一本だけあるしだれ柳がゆらゆらと陽を浴びて揺れていた。

僕たち高校生の、ふらふらとだらしなく歩く姿にどこか似ている。

改札の周囲にはよく見かける制服を着た、僕と同じ年頃の高校生たちが何人かいた。

今は春休みの最中だが、部活のある生徒は毎日学校へ行くだろうから、別に珍しい風景ではなかった。

同類詮索の癖のような物で、どこどここの学校かと制服をチラ見する。

もちろん同校の生徒がいたって、親しくなければ声なんてかけない。

この駅の改札口は小屋のような待合室になっている。

しかし小さくてボロいので息が詰まるから、僕ら高校生などは大抵外で時間を潰すか、さっさとホームへ出る。

立て看板とフェンスの向こうに、僅かに見えるホームの端が丁度目線の高さにあって、風にはためくスカートたちの裾がチラリと目に入って気になった。

ミニ丈のスカートから覗く白い脚は、同年代だつてつい目がゆくものだ。

電車の来る時間が迫って一番近い踏み切りの警報機が鳴り出す。

閉じかける遮断機の下を、丸々とした主婦が駆け抜けているのが見えた。

改札口の手間にいた連中はみな、流れるように改札を抜けて行った。

もちろん僕も改札口へまっすぐ向かおうとしていたのだが……。しかし、それとは逆方向に歩き出した誰かの姿を僕は視界の片隅で捉えていた。

パタパタと軽快な靴音と共に、誰かが駆け寄ってくる。

それは僕の方と言うより、僕に駆け寄って来たのだ。

「あの……」

見知らぬ娘が僕の目の前で立ち止まった。

オリーブグリーンのブレザーにグリーンのタータンチェックのスカート……制服は知っている。

伝統ある進学校で名高い好聖館高校こうせいかんの制服は、地元高校生なら誰でも知っているのだ。

戦前からある由緒正しい進学女子校で、二年後には少子化の波を受けていよいよ共学になる事が決まったらしい。

僕は驚いて身を引く勢いで立ち止まると、自分に声を掛けようとしているのか、それが本当なのか確認する。

甘い香りが鼻をくすぐった。

目の前の娘はあからさまに「ふう」と息を吐くと

「あの……相川哲さんあいかわとおるですよね？」

「あ、ああ……そうだけど」

彼女は、驚いて視線を泳がせる僕を他所よそに喋り続けた。

「あ、あたし……好聖館高校の水原紫里みずはら ゆかりです。この春三年になります」

「いや、あの……」

「あ、ユカリという字は、紫に里って書きます。ちょっと変わってるんです」

「はあ？」

「相川くんは彼女いませんよね？」

「いや……あの……」

「去年の九月以来、6ヶ月以上彼女いませんよね？」  
「な、何だよそのあまりに具体的データは……」

「いや、そ、そうだけど……」

僕は果てしなく困惑した。

「いったいこの女はなんだ？ 何が目的なんだ。」

僕は闇の中で物音を聞いたような、得体の知れない不安に包まれて、ひたすら水原紫里と名乗った娘の水色のブラウスの襟元から、ブレザーの胸元に視線をウロウロさせた。

モスグリーンのリボンが小さく揺れている。

甘い香りが風に流れて僕の周囲をグルグル取り巻く。

彼女の声は留まらなかった。

「それですね……あの、あの……あたしと付き合いませんか？

いや、付き合ってください。付き合いますよ」

紫里と名乗った娘は、必要な事を全て言い終わったのか、再び「ふう」と息をついて僕を見上げる。

恥じらい半分、決意半分のような微妙な微笑。

浅めの二重が涼しげで、でも睫毛はしっかりカールされている。

身長は……160センチ弱くらいか？ 確か、前に付き合っていた恵美もこのくらいだったと思う。

いや、もう少し小さかったか？

前髪を作らないワンレンを横分けにしてヘアピンで留めたおでこが、春の陽光に照らされてちよつとキュートに見えた。

長い髪を三つ編みにするような校則は特にないようで、その辺が地方都市に顕在する中途半端さなのだろうけど。

耳から外れた長い後れ毛が数本、たおやかに風に流されて揺れている。

化粧は禁止のはずだが……春休みだし、やっぱりマスカラとリッツくらいは必須なのか……。

僕は彼女の瞳の虹彩をチラリと見ると僅かに視線をそらして、黒々と伸びる睫毛や、小さくて丸い鼻の頭、なんだか濡れたように艶の在る唇などを眺める。

卵の先のように絶妙な丸みをおびた顎先……。

顔が小さい。パーツが小さい。

「で……どうですか？」

紫里は手に持った革製のスクールバックの取手を強く握りなおし



た。

この界限で指定のスクールバックが革なもの、好聖館の特徴だ。小物ひとつとっても、上品さが見え隠れする。

僕は目の前の彼女に何処と無く現実味を感じなかった。

まるで液晶画面を挟んだような不思議な感覚。

この状況はまるでバーチャルだ。

「いや……どうですかって言われても、今会ったばかりでキミの事まったく知らないし……ていうか、なんなの？」

僕は何度もカラーリングを繰り返して少し痛んだ髪をかき上げる。僅かに苦笑するしかない。

春休みに入って直ぐ、ハッシュドブラウンというイマひとつ難解な茶髪にチャレンジしたばかりだ。

実際はどうと言う事はない、こげ茶色だけど。

彼女は悩ましげに細い眉を動かして、かき上げる僕の頭を見ながら僕の問い掛けに少し困った顔をする。

しかしその時僕は気付いた。

彼女の背景に見える線路上には既に僕が乗るはずの電車が到着して、まさに今発車する所だった。

町おこしの為に車両イッパイに描かれた9人のヒーローキャラクターが、ゆっくりとスライドして視界から消えて行く。

「あつ、電車……」小さく叫ぶ。

その言葉に彼女も気付いて後を振り返った。

「あつ、ご、ごめんなさい。あの電車に乗るはずでした？」

乗る為にここへ来たに決まってるだろ……。

「いや……まあ。次があるからいいけど」

次の電車は26分後だ。

「じゃあ、次の電車が来るまでそのマックでお茶しません？」

紫里は開き直ったような笑顔でちいさく駅の斜向かいを指をさす。白くて細くて長い指だ。

仕方ない……独りでポケットと電車を待つよりずっとマシだ。  
僕はついそんな事を考えてしまったのだ。

この時さよならをしていれば何の問題もなかったのに、紫里の涼しげな瞳が陽光を吸い込んで深い緑色に輝いていたのを見た時、僕の心まで吸い込んだのかもしれない。

僕は苦笑して、仕方なく彼女と一緒に歩きだした。

なんだか体中が妙にこそばゆい感じがして不自然に足を踏み出していただけ、乾いた風が清々しかった。

二人の肩には、当然のように不自然な距離があった。

## 【1】乗り過ごし（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

〓5話くらいまで連日更新する予定です。

## 【2】ウソ

人は相手のどんな所に魅力を感じるのだろうか……何がキツカケで相手を好きになってしまふのだろうか。

それより、僕と付き合った娘は、僕の何に惹かれたのだろう。

紫里は涼しげな眼をパチクリと瞬きさせて、愛くるしい一直線の視線を注いで喋る。

その見つめる視線は僕を捕らえて離さない。

魔法にかかった道化師のように、つつい彼女の言葉に応えようとしてしまう。

「あ、相川君は白鳳工業高校だよはくおうね」

「ああ……そうだよ」

窓際の席に着くと、彼女は直ぐに口を開く。

「部活は美術部。ゴールデンウィークに、毎年他校と合同で展覧会してるよね」

「あ、ああ……よく知ってるね」

「誕生日は七月四日のアメリカ独立記念日なんだよね」

「ただデータ収集してんだ……」

「そ、そうだよ」

僕は彼女に見つめられるまま、苦笑した。

彼女は相変わらず僕を真っ直ぐに見つめながら、手をヒラヒラさせて自身の顔を扇ぐ。

陽射しが暑いのか、照れて熱いのか。

「なんか、暑いね」

白い歯を見せて少しはにかむ。

僕の自己防衛本能が発動する。

魅入られて理性を失うな。

蛇に魅入られた蛙の如く、身体は微かに硬直する……。

それを防ごうとするかのように、僕は時折視線を僅かにそらして彼女の頭に着いたピン止めなどを見る。

ガンブラックのような、淡く紺色に艶の在る黒色のピン止めが、陽射しを細く撥ね帰す。

それでもこちらを見る彼女の視線がくすぐったくて、今度は周囲を見渡したりした。

落ち着かない。

手のひらの汗を、ジーンズで拭った。

「あ、あたしは水泳部。と言っても、今日退部届けを出してきた帰りだけど。誕生日は8月15日。終戦記念日だから、よろしくねっ」  
彼女は少し速い口調で言うと、笑顔のまま手元のコーラを飲んだ。  
いや、飲むのだと思ったら、ストローに口をつけるとブクブクっ  
と息を吐く。

炭酸が泡だって、氷が音をたてる。

さすがにギョツとして身を引いた。

彼女はそんな僕の微妙な表情に気付くと

「炭酸弱めないと飲めなくて」

「そ、そう……」

僕はさり気なく笑って「水泳得意なの？」

「うん。平泳ぎと背泳ぎ」

この時期にも既に水泳部の部活が在るという事は、温水プール設備の噂は本当らしい……訊きたい事は山ほどあった。

しかしそれより、清楚でどこか凜として、何時も遠巻きに見ていた伝統ある女子高の生徒は、間近に接するとごく普通の笑顔で僕の目の前にいた。

しかもこの娘は行動が微妙……。

「なんで辞めたの？」

「うん……見切りをつける、いい機会だと思ってさ」

一瞬だけ彼女は駐輪場の方を悲しげに見たが、直ぐに僕に視線を戻すと目を細めて微笑む。

見切りという言葉を、僕は深く考えなかった。

「でもラッキーだった」

「ラッキー？」

「だって、春休み前に何度か声をかけようとして何時も失敗して、こんな日に偶然機会が来るんだもの」

「あ、あのさ……なんで、俺？」

僕はどうにも不に落ちなかったのだ。

こんな事男として生まれて初めてだし、だいたい会った覚えの無い娘がいきなり声をかけてくるか？

ゼツタイ何かの悪戯だと思った。

もしかして、好聖館ではやっている悪い遊びかもしれない。

最近見かける学校裏掲示版にでも書かれたらしゃれにならん。

「えっと……白工（白鳳工業高校）の近くに友達の家があって、よく遊びに行くの。それで、相川くんを見たのよ」

「近くって？」

「裏門の傍。相川くん何時も裏門を使うでしょ？」

「あ、ああ」

確かに僕は裏門を利用している。

駅からだと、正門まで無駄に住宅地を回り込む立地なのだ。

だから、電車で来る連中のほとんどは裏門を利用する。

僕はいまひとつ不に落ちないまま頷いたが、彼女の視線に囚われるとそれを否定する事は出来なかった。

「で、でもさ。いきなり付き合うとかでいいわけ？ お互いに全然

知らないじゃん。外見以外」

紫里は一瞬だけ考える素振りを見せたが、それはほんとに瞬くほどの一瞬だった。

「じゃあさ、これからどっか行こう。お互いに知り合おうよ」

「はあ？」

「ねっ、いいでしょ。そしたらあと、決めるだけじゃん」

「いや、決めるだけって……そんな」

僕は結局、これから遊ぶ約束をしていた幸彦に電話をした。

『はあ？　なんだよ、急用って？』

大きな疑問符が、電話の向こうから喚く。

「だから、急な用事だよ……そう、おふくろに買い物頼まれてさ」

『おふくろさん帰ってきたのか？』

「はあ？」

『おふくろさん、先週出て行っちゃったんだろ？』

そう。僕の母親は先週いきなり家を出て行ってしまった。

オヤジに女がいたらしい。

仕事人間だと思っていた親父に裏切られた事がよほど悔しかったのか、おふくろは親父のクレジットカードを財布から全部抜き取って出て行った。

それでも親父は隠し持っていたアメックスのゴールドカードがあれば問題ないと言って笑っていた。

そんな家にいるのは、最近息がつまる。

ただ、親父が仕事人間なのは本当の話で、おかげでずいぶん速い昇進を繰り返していたらしく、今では会社の役員の一人らしい。

だから、家にはほとんど帰ってこない。

そんな親父も、本当は息抜きのつもりで外の女に手を出したのかもしれない。

いくら生活が安定しても、家庭を顧みなければ意味が無い事を、大人は忘れてしまうようだ。

それとも、安定と喧騒の狭間で混乱する現実から逃げたくなるのだろうか。

「あっ、ああ……そうだよ。一時帰宅してさ、それでいろいろ」

『一時帰宅？　そんなのあるのか？』

「とにかくさ、明日な。詳しい言い訳もするからさ」  
僕は早々に電話を切った。

「よかった。じゃあ一緒に遊べるね。何処行く？」

横で様子を覗っていた紫里は、肩に着いた髪の毛を後ろへ払うと、  
僕を見つめて笑った。

瞳の中に白い太陽の陽が映りこんでいた。



### 【3】成り行き

紫里はとにかく人懐っこくて、人見知りする僕の心の扉を小さな隙間からグイグイと覗き込む。

だけどそれは決して不快なものではなく、寧ろ心地よくて自分にこんなに女性との交際能力があるのかと錯覚させるほどだ。

別に女の子と付き合えないような自閉的な性格ではない。

ただ、いきなりナンパしてその日に食事をするとか、初対面できなり弾む話題を次々に繰り出すとか、そんな事が出来ないだけだ。確か恵美と知り合ったのも幸彦の中学の同級生で、最初は複数で遊んでいた。

その前だって、グループで遊んでいるうちに気の合う相手を自然に見つけたような感じだった。

だから、さっき会ったばかりのこの紫里とマックに入って会話も途切れず、予定の駅を通り越して繁華街に繰り出して一緒に歩いている自分を、何だか他人事のように冷静に分析してしまうのだ。

しかし、分析しようとしている割には、どんどん彼女のペースにハマってゆく。

やっぱり舞い上がっているのか……。

紫里は歩いていると突然向きを変えて、小さな子供のように雑貨屋の店頭商品へ駆け寄る。

引っ張られる僕も、急な方向転換にヨタついて、デレデレと苦笑に似た笑みを浮かべながら彼女の後を追うのだ。

彼女は人の話を聞くと、飼い主を見つめる仔犬の如く、とにかくジッとこちらの瞳を見つめる。

例えば雑貨屋で腕飾りやぬいぐるみを見ている、僕が話しかけるとこちらへ振り返り必ず視線を向ける。

僕は、仔犬のようなその視線が気恥ずかしくて、思わず目を伏せ

てしまう事もしばしばだ。

「ねえ」

「ああ？」

「けっこう楽しくない？」

紫里は丸々した白いフクロウのぬいぐるみを頬にスリスリしながら僕を見つめて笑った。

「あ、ああ……」

僕は一瞬交わした視線をほんの少しそらす。  
ていうか、売り物に頬ずりすんなよ……。

本当はメチャクチャ楽しかったけど、それを見透かされないようにクールを装う。

「じゃあ、決まり？」

「えっ？ なにが？」

紫里は僕のスタジャンの袖を指先で掴むと、売り場を移動する。

「ねえ、このストラップお揃で買おう」

まるで、数ヶ月の付き合いであるかのような口調だった。

紫里は、変な毛糸球で出来たような小さな人形を二つ手に取る。

毛糸の色で、恋愛や友情や金運など願掛け目的が異なるらしい。

僕は彼女の勢いに押されるように、一緒にレジへ向った。

低いビルの向こうから西日が眩しく照らして、影が長く伸びきっていた。

駅のホームには帰宅途中のサラリーマンがザワザワと行き交う。

「コレで決まりでしょ？」

帰りの電車に乗り込むと、紫里が言った。

小さな小袋から、携帯ストラップをひとつ取り出して僕に差し出す。

「あ、ああ……うん」

僕はぼんやりとした動作で、それを手に取った。

その途端、心臓の鼓動が高鳴る。

契約は交わされた。

こんな始まりでいいのか？

交際が始まったというにはあまりにもあっけなく、現実感もなかった。

夜道で大金の入ったハンドバッグでも拾った気分だ。

しかし僕は、自分でも知らないうちに彼女と契約を交わしていたのだ。

それは、彼女しか知らない秘密の規約。

「じゃあ、メール教えて」

彼女は自分の携帯電話を差し出す。

「あ、ああ……」

僕も自分の携帯電話を取り出すと、彼女が僕に向けて差し出す携帯を困惑して見つめた。

「赤外線……使えるでしょ？」

「赤外線？」

何となく聞いた事はある。しかし、そんな機能使った事もない。

「俺、やかた知らないんだけど……」

「もう、しょうがないなあ」

紫里は苦笑すると「ちよつと貸して」

僕の携帯をグイッと掴む。

反射的に、僕の手はピクリと動いて反応した。

彼女の白い冷んやりとした指が僕の手に触れたから。

紫里は何か操作をしてから自分の携帯と向かい合わせに近づけた。

「はい、終わり」

パチンと音を立てて、閉じた携帯を僕に差し出す。

「えっ？ これでもう入ってるの？」

僕は紫里から渡された自分の携帯を開いた。

確かに水原紫里の名前と電話番号、そしてメルアドが入っている。  
アドレスを自動登録する。

「へえ……」

僕は呟くように携帯を閉じると、彼女から貰ったストラップを取り付けた。

「俺のも入ったの？」

「うん。もうバッチリよ」

彼女の笑顔に見つめられながら、僕は携帯をしまう。

紫里が自分の携帯に同じストラップを直ぐに着けない事に何の疑問を持たないまま……。

間も無く僕が学校へ行く際に乗降する駅に着くと、紫里はそこで降りた。

「じゃあ、メールするね」

彼女は目を細めて笑うと、少しおっとりとした口調で言う。

手のひらをこちらに向けて振った。

僕は見慣れた駅のホームを歩く彼女を、見慣れない風景として暫く眺めていた。

電車が走り出すと紫里は振り返って、窓の遠くからもう一度手を振る。

気がつくと、僕も小さく手を上げていた。

【3月28日PM 23..33】

……………

突然の出来事に僕は困惑する。

それでも、明日からは今日までと違った新しい日々が待っている。  
うだ。

世の中には変わった娘がいるもんだ。  
いや、世の中何が起こるか判らないというのは、  
本当らしい。

### 【3】成り行き（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

深夜の更新ができなくて、朝になってしまいました…。

次話は7／20深夜0時過ぎの予定です。

#### 【4】連休の桜

『はあ？ 夢見てんじゃねえよ、哲』

電話の向こうで幸彦が声を荒げる。

「本当だって。本当に向こうから声をかけてきたんだよ」

『ありえねえ。何でお前なんだよ』

「そんなの知らねえって」

僕は極めて事実を話したつもりだ。

好聖館高校の娘が、向こうから僕を逆ナンしてきた事実。

しかし、幸彦はいっこうに信じようとしなない。

『友達の家でお前を見かけて惚れたって？ そんな事あるか？』

「俺にいうなよ。向こうが言っただ」

彼は極めて否定的だった。

しかし、そんな事を言われても、彼女がそう言ったのだから仕方がない。

それを信じないで何を信じるのか。

いや、僕はこの時紫里の心の内をもっと考えるべきだったのかもしれないが、向こうから猛烈なアプローチを受けて邪険にできるほど、僕は普段からモテモテの男ではない。

「とにかく、様子をみるよ」

『おまえ、新手の宗教とかに勧誘されんなよ』

幸雄は終いには失笑していた。

僕はプチッと通話終了ボタンを押す。

幸雄に話した事を少しだけ後悔していた。

そんなに否定的に意見されたら、何だかいかにも彼女が宗教的勧誘が目的で僕に近づいたかのように考えてしまう。

浮ついた心の中に小さな暗黒を抱きながら、僕は携帯電話に着けたストラップを眺めた。

突如メールの着メロが鳴る。

「へ今日はありがとー。これから楽しい毎日を思うと今からウキウキだよ」

「僕は何だか複雑な気持ちでそれを読むと、ごく差し障り無い言葉で返信した。」

それでも心の中は踊っていた。

「哲ってば、ありえないよ」

紫里は大きな口を開けて笑った。

とりあえず間近で指さすなよ……。

「なんで、あたしが宗教勧誘とかするの？ マジありえない」

彼女はお腹を抱えて笑いが止まらない。

僕達は二日後、出会った駅前で再び待ち合わせした。

短い春休み。出来るだけ遊ぼうという事だ。

「だってさ、変だろ？」

「だから、この前言ったじゃん。あたしが信じられないの？」

紫里は僕の目をまっすぐに見つめて少し困ったような笑みを浮かべた。

あの涼しげで、でも仔犬のような目。

「いや……そう言うわけじゃないけど」

「じゃあいいじゃん」

彼女は僕が羽織ったパタゴニアのジャケットの袖を引っ張る。

彼女の笑顔の前では、僕の疑問なんて何の意味もなさなかった。

黒い髪がふわりと揺れて、甘いフルーツのようなシャンプーかムースの香りが漂うと、魔法にかかったように全てを忘れ去ってしまう。

こうして僕は最初の不安を打ち消すと、紫里と過ごす時間の中で勝手に安堵し始めていた。



彼女の一面しか知らないまま。

彼女はあまりにも気さくで、女を感じさせない事も多い。

莊明とうか、サバサバしてあっけらかんとして一緒にいる事に気兼ねがない。

仔犬に見えるのはそのせいだろう。

それでいて時折、明らかな女の顔をこちらに向ける。

眉をクイツと上げて頬をふくらとさせ、澄ましたよりもやや笑顔……。

そうだ、閉じたまま口角を上げるからだろうか。

そんな時、瞳の奥に明らかな女の光が見えるのだ。

その光はまるで、冬の夜空に輝く一等星のように涼しげで眩しい。

紫里と出逢って一カ月が経っていた。

ゴールデンウィークの前半、僕は他校との合同絵画展覧会の為に、市内の小さな丘に在る公園へ来ていた。

市内の高校が五校合同会を組んでの展覧会で、残念ながら好聖館高校は含んでいない。

僕は油絵の風景画と水彩のイラストを二点出品したが、作品はひたすら家で描きあげたので、部活らしい活動はしていない。

前日にミーティングがあっただけで、部長が合同会議の報告と展示会のプログラムを配っておしまい。それだけだ。

合同展覧会は丘の上に在る、桜が自慢なのに何故かつつじ園と呼ばれている大きな市営の公園で行われた。

大きなキャンバスを持って坂道を登るのがけっこう大変で、丘の上に在る商業高校生徒以外はみんな、毎年僅かな不満を漏らす。

紫里と会う約束はゴールデンウィークの後半まで無かったのだが、初日の昼頃に突然私服姿で現れた。

「哲」

僕が屋外の展示場をウロウロしていると、突然声がした。

紫里は手に持ったバンダナの包みを掲げて笑っている。たぶん弁当だ。

「お昼持って来たよ」

僕は小走りに彼女へ駆け寄る。

周囲にいる他校の連中の視線が、僕と紫里に交互に注がれていたから。

合同展覧会の参加には二つの女子高が参加しているのだが、そばかすにメガネとか、かなりふくよかで頬がリンゴのように赤かったりとか、とにかくあまりパツとした娘はいない。

そんな合同会の中で、見るからに同世代である白いワンピース姿の紫里は、ある意味異端者だった。

「どうしたんだよ、いきなり」

「ちょっと驚かせようと思ってさ」

紫里はそう言って笑うと「お昼時間まだ？」

少し髪を切ったらしい。

というか、何時も横分けにしている前髪を下ろしていた。たぶん、前髪を造る為に少し切ったと思う。

「今、交代で取ってるから、後二十分くらいしたら……かな」

「そう……」

宙を舞う桜の花びらに誘われるように、サラサラと紫里の髪が揺れていた。

「メールとかくれれば、調整して貰ったのにさ」

「う、うん。いいよ、別に」

紫里は膨らんだトートバッグをブラブラ揺らして

「じゃあ、少しその辺見てる」

「ああ、わるい……」

なんだか聞き分けのいい紫里に、僕が罪悪感を受けてしまった。  
昼の時間が来ると、僕は紫里を促して会場から目の届かない場所  
まで行ってひとつのベンチを占領した。

満開時期から少しだけ遅れた日程では在るが、周囲にひしめく桜  
の枝葉まだまだ桃色の花でいっぱいだった。

紫里は翌日も予告無しで公園の会場にやって来た。

「クッキー焼いたよ」

連日訪れる彼女の姿と、そこへ近づく僕の姿を見つめる周囲の視  
線は少々痛かった。

僕は紫里と弁当を食べると、自分で焼いたと言う彼女持参のクッ  
キーを合同会の連中に振舞った。

たぶん彼女もそんな事もあると考えていたのか、充分な量があっ  
た。

紫里が好聖館高校の生徒だと知ると、周囲の連中は彼女と親しい  
僕に冷ややかな視線をザクザクと投げかける。

それでも手作りクッキーを口にすると、男子連中はずいぶん喜ん  
だ。

挙句、チョコクッキーだと思って口に入れたそれが、ただの焼き  
すぎだと知った連中は、僕を少しだけ慈悲深く見つめた。

## 【5】異国のひと

花びらが遊歩道を白く覆い尽くして、陽の光りに照らされていた。散りかけの桜は、遅咲きの木と相まって再び頭上は満開に近い花の戯れに包まれる。

春の合同展覧会三日目、例によって紫里が持って来た弁当を食べっていると、近くで声がした。

「ユカリー」

僕は声の方を振り返り、ギョツとする。

金髪……いや、アレはブロンドと言うのだろうか。

紫里の名を呼んだのは、真っ白な肌でブロンドの娘……僕は他のユカリがいるのだろうと思った。

思わず周囲を見渡すが、ブロンド娘は明らかにこちらを見ている。紫里が小さく手を振って、ブロンドの彼女はこちらへ近づいて来た。

「知り合い？」

僕は紫里に小声で訪ねる。

紫里は小さな水色の箸をくわえたまま「ふん」と頷く。

「クラスの友達」

「クラス？」

僕が驚いたのは、紫里に近づく彼女の髪がブロンドだからではない。

水色のボタンダウンシャツに赤いタータンチェックのスカートを揺らしながらホクホクと近づいて来る。

ブロンドは自然だ。彼女にしてみれば。

紫里の目の前で立ち止まった彼女は、茶色の瞳で笑う。

「ユカリ、ボーイフレンド？」

どこかたどたどしく、それでいてなんか悠長に言葉を発する。

紫里のクラスメイトは外人だった……異端者というか、異国の人。  
「今ね、ホームステイに来てるの。ルーシー」

紫里は僕に微笑んで、次にルーシーを見上げる。

「ワタシ、ルーシー・ルーテシアだお。ヨロシクだお」

「ホームステイ？」

紫里でもルーシーにでもなく、僕は声をだす。

ていうか、語尾の「だお」ってなんだ？

本場の白人の肌は、春の紫外線を浴びて、ほんのりピンク色をしていた。

それが少しテカッて、まるで風呂上りのように色気があるのだ。

少しカールしたブロンドの髪が、妙に艶やかだ。

クルリとカールした長い睫毛は、ホンモノだろうか？

でも、どうして「だお」なんだ？

「こちら友達の哲くん」

「ヨロシクだお。トオル」

ルーシーはそう言って頭をコクリと下げると、紫里の隣、僕とは反対側に座る。

「イイネ、オベントウ。ユカリガツクッタ？ ウラヤマシイだお」

「あ、ルーシーも食べる？」

紫里は自分の弁当から、だし巻き卵を一切れ箸に突き刺して、ルーシーの口の前に差し出す。

彼女は白人女性の割には小柄で、背丈も体格も紫里とそう変わらない。

ニコリと笑うと、小さいな顔を突き出して、紫里の差し出した卵焼きを口へ入れた。

「オイシーだお！」

ルーシーは頬を膨らませて笑った。

うっすらと浮かぶそばかすさえ、なんだかチャームポイントになっている。

好聖館高校は、積極的にホームステイなど海外の生徒を受け入れているらしい。

ルーシーの他にも三人ほど外国人留学生がいるそうだ。

彼女はホームステイ先の家族と、桜見に来ていたらしい。

いささか不思議な日本語を悠長に話す異国のルーシーは、十分ほど紫里と話すと

「ジャアネ。ユカリ、トオル」

何故か僕にだけはウインクを飛ばして立ち上がると、ブロンドの髪を揺らしながら桜が立ち並ぶ敷地の遊歩道を去って行った。

そんな感じで結局展覧会の間も、ほとんど毎日彼女と会っていたという事になるだろう。

その日の紫里はよく写メを撮った。

「あの桜、まだかなり咲いてるね」

紫里は、屋外展示場で暇そうな僕を見つけては引きずりまわす。

ゴールデンウィーク後半のデートでは、何度もプリクラ機器の前で頬を寄せ合った。

「あれも撮ろう」

「あ、ああ」

「ほら、あっちのやつ新型だよ」

「おい、これ1回500円だぞ」

「じゃあ、あたしが出すよ」

日差しは日を追うごとに強さを増して、それに釣られるようにカップルとしての高揚感が高まる。

そうばう

僕はそんな喧騒にも似た匆忙に呑み込まれながら、恋愛の幻影に獲り付かれていたのだ。

.....

ホームステイをしているオーストラリアの学生に会った。

フロンドの白人の少女は不思議な色気に包まれていた。

彼女が使う不思議な日本語。その語尾の「だお」は、どうやら日本のインターネット掲示板の影響らしい……。

## 【5】異国のひと（後書き）

明日も次話投稿できると思います。  
宜しくお願いいたします（^^）



## 【6】大人

ゴールデンウィークが明けた日は大雨で、残っていた桜の花は見事に散り終えて道端に湿った花道を作っていた。

その翌日から、日差しは急激に強さを増した。

「いいよなあ、好聖館の娘……」

最近、幸彦が嫌味っぽく僕の横でよく呟く。

僕の現状を認めながら、まだどこか事実を否定している。

みな、好聖館の生徒は見たままに清楚で上品で奥ゆかしくて、とつき難い……そう思っている。

正確ではないが、僕の学校で好聖館高校の生徒と付き合っているのはごく少数で、学年に一人いるかいらないからしい。

それだけ高値の花だから、理想は幻想を生む。

実際はありふれたごく普通の女子高生と何も変わらないのだけだ。

何時ものように放課後、紫里と一緒に時間を過ごしていた時、僕はふとした事に気付いた。

それは今日、教室で見た光景が頭を過ったからだ。

クラスの女子がプリクラノートを見せ合っていたのだ。

以前のクラスの友人と撮った物や、×印のついた元カレ。新しい今カレ……。

それぞれに見せ合いながら、教室の隅でギャーギャーと甲高い笑い声で盛り上がっていた。

しかし紫里は……？

以前、彼女がスケジュール帳を取り出した時、そこには一枚もプリクラが張られていなかった。

いや、表紙の内側に一枚だけ、知らない女の子と撮ったものが一

枚貼られていた。

手帳を取り出した時カバンの中が少し見えたが、他にプリクラ手帳らしき物も見えなかった。

彼女はアレだけ僕と撮ったプリクラを何処にやっているのか？

普通は身近な物に貼りがるのが女子のパターンで、手帳だったり携帯だったりそれは様々だが、何故か自然に目に入り易い場所に貼りがるものだ。

しかし、紫里の持ち物には何処にも僕と撮ったプリクラの姿は見えない。

紫里はコーラのLサイズのストローに口を着けて、ブクブクッと吹く。

「他の飲み物頼めばよかったんじゃない？」

「なんで？」

「炭酸苦手なんだろう？ コーヒーとか飲めば？」

僕は自分のアイスコーヒーを指でつつく。

「苦いのヤダ」

「じゃあ、オレンジジュース」

「ミカン嫌い」

紫里は目を細めて甘えたように笑うと、再びコーラをブクブクと吹く。

彼女は果物に例えると、きっとブルーベリーだ。

見かけはとっつき難い不透明絵の具のような濃い紫色で、国産の果物と比べるといかにも異色な色合。

上品そうだが、苦いか酸っぱそうで近寄りがたい。

見た目では誰もが触れる事に躊躇するけれど、口に入れると濃厚な甘さと香りがある。

彼女のクールで清楚な装いと、甘ったるい感じの内面はブルーベリーだ。

そろそろ聞いてみようか……僕は喉元で押さえ込んだ疑問を切り出す。

「なあ。紫里は、プリクラ帳とか持ってないの？」

「えっ？」

モスバーガーの窓際でホッとドックを啜えながら、彼女は僕の問い掛けに目をパチクリとさせてくぐもった声を上げた。

僕は食べ難い照り焼きバーガーの端っこを齧りながら

「だって、さんざんプリクラ撮ってるのに、何処にも貼ってないしさ」

紫里は炭酸の抜けたコーラでホットドッグを喉に流し込むと、長い睫毛を何度も瞬きさせる。

「あたしは家にしきり派だから……だってほら、何処かに貼ると劣化してダメになるじゃん」

彼女は笑った。

「そうか。そうだよな」

「そうだよ。あたしは机の中にコレクションしてるの」

言われてみれば確かに、大切なステッカーとかはよく使わずにしまふ事も多い。

彼女にとってのプリクラシールも、そんな部類なのか。

机の中にしまっているのがベストだろう。普通、コレクションと云ったらそんな風に大切にしまっておくものだ。

好聖館だしな……。

会話の最中、紫里は突然僕の後ろに向かって手を振った。

繁華街から少し離れたこのファーストフードショップは学生よりも車のお客が多いから、最近よく来るのだが。

僕はチラリと振り返って紫里の視線の先を追った。

今日は日本人だ……。

トレーを戻して帰るところだったのか、紫里が手を振った相手の彼女は身体の向きを変えてこちらに近づいてくる。

黒髪を後ろで二つのお下げに束ねた少しジミ目な娘で、おそらく同じ学校の娘だろうと直ぐに判る。

今時お下げを作るこの辺の娘といえば、好聖館だけだ。

彼女は僕達のテーブルに近づいてくると、無言で両手を動かしてジェスチャーを見せる。

驚く事に、紫里も無言で笑ったままジェスチャーを返した。

僕はその異様な光景に目を丸くする。

紫里と、目の前に立っている娘を交互に眺めた。

ちがう……ジェスチャーっていうか、これは……手話だ。

「同級生の尚美ちゃん」

紫里は傍に立つ娘を僕に紹介した。

無言で手話を使うこの娘は、おそらく耳が聞こえないのだ。

僕は出そうとした声を呑み込んで、片手を小さく上げてニカツと笑ってみせる。

動揺していた……。

尚美は僕に向って軽い会釈をすると笑顔のまま、紫里と手話で話す。

「ステキな人だってさあ」

紫里は悪戯っぽく笑って、尚美の手話を通訳した。

尚美は直ぐに手を振って、出口付近で待つ他の友達と一緒に店を出て行った。

僕は只ならぬ事態にあっけに取られ、暫しの間出口を見つめた後、紫里に向き直る。

「好聖館って、障害者もいるの？」

「うん。ウチは勉強しようという意欲があれば入れるから」

「そして成績優秀なら。だろ」

僕は少しだけ脾肉って嫌味っぽく笑う。

「紫里、手話できんの？」

氷が溶け出して薄くなったコーヒーに口を着ける。

「うん。少しね」

彼女は右手に拳を作って右頬に当てると、何処かのメイドの萌えポーズのようにその拳をクニクニ動かす。

「これ、仔猫」

両手のひらを開いて、胸の前で両指先を合わせて大きな屋根型を作る。

「これ、お家」

右手のひらを、胸の前で下から上にはらい上げる。

「これ、解らない。だよ。でね、『お家が解らない』で、迷子なの」紫里は童謡などから手話を覚え始めたそうだ。

つまり、彼女が示したのは『迷子の仔猫』と言う事で、犬のお巡りさんの歌詞だろう。

「50音やアルファベットを示す手話もあるけど、数が膨大で面倒だから普通はジェスチャーがメインで、補足に50音を入れるんだよ」

紫里は再び右手を上げて軽く拳を作ると、親指、小指、人差し指と中指。順に指を立てて、素早く『あゝお』だけを示して見せた。

彼女の笑顔が、なんだか大人に見えた。

少し前、子供のように頬を膨らませてコーヒー苦い。ミカン嫌い。と言っていた彼女はそこにはいない。

さっきもそうだ。

手話を話す紫里が、一瞬遠くに見えた。

喧騒の中を、暇つぶしで漂う僕達高校生とは何かが違う気がした。それは日本語を話す外国人のルーシーと笑顔を交わす様とも違っていった。

向こう側のフィールドに彼女はスッと入り込んだ。

尚美と紫里の二人は僕から、いや周囲から隔離された音の無い世界に入り込んで二人だけのコミュニケーションをはかる。

僕は何も解らないまま、ただ傍らで眺める事しかできない。

この時再び僕は思った。

紫里には謎めいた、底知れない奥深さがあると。

そして不安になる。

こうして表面的な付き合いだけで、彼女の奥深い本当の彼女を僕は知ることが出来ているのだろうか。

僕は周囲に見せているままが、ほぼそのままの僕だ。

普段見せない知識や格式や博学なんてほとんど無い。

紫里に感じる些細な謎や行動への疑問は、彼女の持つ奥深さに通じると思った。

奥深いからこそ、僕の常識とはちょっと異なる行動が時折見えるだけだ。

その裏側にはきつと、彼女の知識や思考に促される他の常識が在るのだと思った。

プリクラに対する彼女への疑問は、とっくに薄れていた。

## 【6】大人（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

まだ序盤ですが、次回から更新ペースが少しおちます。

次回は7／24深夜更新予定です。

## 【7】ゆるる衝動

幸彦は一緒に話していても、何処か僕の後ろの何かに視線を囚われている事が在る。

こっちの話を聞いているのかいないのか……相づちも非常に曖昧だ。

外でお茶なんてしていると、特に視線は何処かへ泳ぎだす。

聞いているか聞いていないのか、あからさまな疑問が湧くと、僕は話を途中で飛ばす。

話しがいが無いにもほどがあるからだ。

自分の話しは一心不乱に話すくせに、人の話しは途中で飽きてくるらしい。

「なんだよ、タイプの女でもいたのか？」

「いや……なんか知った顔がいたからさ」

僕が訊くと幸彦は必ずそう答える。

彼にとって気に入った娘の顔は、全部どこかで会った顔に見えるらしい。

でも、何故か気が合う幸彦は、確かに気が置けないから一緒にいてラクだ。

そんなヤツと何時も一緒なものだから、きっと紫里の一心に見つめる視線が愛おしく感じてしまうのだ。

しかし、再び僕の心に紫里の行動に対しての懸念が沸き起こる。鬱に満ちたあの暗い天気、そうした気持ちを湧きたてるのか。

久しぶりの雨が朝から景色を潤していた。

教室の窓には雨粒が滴り、薄暗い校舎の中はどこも蛍光灯が照らしている。

カツカツとチョークを書きなぐる音だけが、気だるい教室に響く。



少しくすんだ淡色の光に、窓を閉め切った教室内はどこか鬱めいている。

「ねえねえ、見て見て。この前撮った写メ」

美咲が学食で、僕の肩を後から掴んだ。

美咲は同じ学校の工業化学科にいる。僕のいる電気科にも多少の女子は在籍するが、工業化学科は約半数が女子だ。

そのまま大学の理系に進む女子も多く、医薬品会社などへ就職する為に専門学校へ進む連中も多数いる。

ウチの工業高校は世間のイメージのそれとは違って、進学率も就職率も高い。

確かに普通高校に比べれば強面（しわおもて）の連中もいるし、やたらと練習量の多い気合で満ちた運動部員もいる。

それでも学力がそれなりにあるから、そう荒れ果てた校内風景でもないのだ。

美咲が半ば無理やりに見せてよこしたのは、公園の桜の前で撮った彼氏とのツーショット写真だった。

バックに見える桜はもうかなり散り始めていたが、美咲の笑顔を彩るには充分だ。

美咲とは中学の時から腐れ縁だ。

彼女は僕と知り合った少し前に、時計職人だった父親を亡くしている。

時計職人なんて日本にまだ存在していたのかと少し驚いたが、国内でも自動巻き時計が見直されている昨今、機械時計を扱える職人は貴重なのだそう。

知り合った時から美咲の腕には男物の少し大きな時計が目立っていた。

文字盤は白で、表面を覆うクリスタルがやけに輝く上品なデザインだったが、彼女の細くて白い腕に、それは不自然で神秘的に見える。

た。

美咲は父に貰ったものだと言っていたが、文字盤に描かれたIWCのマークを僕はその時知らなかった。

おそらく中学生の誰もが、よく判らないメーカーの何でもない時計だと思っていただろう。

僕がIWCを知ったのは去年だ。

本屋で何気なく見たビンテージウォッチのムック本。その後のページにはIWCの現行モデルが載っていた。

どれも価格は60万円以上で、その中に美咲の腕に光っていたモノもあって、思わず膝が碎け落ちそうになったのを覚えている。

オリジナルは革ベルトなのに、どうして美咲のはステンレスのベルトなのかと訊くと、父親から貰った時は革ベルトが着いていたが、劣化してしまふと嫌だからステンのベルトに換えて使用しているのだと言う。

それを聞いた僕は、父親が彼女を思う気持ちと、美咲が父を思う気持ちは同等な気がしたのを覚えている。

父の行動に怒り家を出て行った僕の母親は、僕をどう思っているのだろう。

忙しい仕事の息抜きで女を作る父親は、僕ら家族をどう思っているのだろうか……。

「ねえ、ちゃんと見てる？　ね、イケてるでしょ？」

彼女は自分一人の写真と、彼氏の写真も次々に表示させる。

錆びた鉄のような長髪を後ろで結んで片耳にピアスを着けた彼氏は、あまり賢そうには見えない。

中学から知っている美咲の成績や普段の良識在る性格を考えると、あまり釣り合っているとも思えないが……。

「やけにラブラブだな」

「うん、付き合い始めてやっと二ヶ月経ったよ」

美咲が自分の携帯画面を見て笑う。

左の手首には、相変わらず大きな時計がブラウスの袖から見え隠れしながら光っていた。

翌日の土曜日。

僕は紫里と映画を見に行き、その後同じ建物にあるファーストフード店で昼食をとった。

紫里は春限定のアイスマイルクココアを見つけると、有無を言わず注文する。

コーラをブクブクさせるのが好きなわけではないらしい。

暫く他愛の無い話を続けていると、僕は昨日の美咲を思い出した。美咲が次々に見せた彼氏の画像。

紫里も学校の友達などには、僕の画像を見せてのろけたりしているのだろうか？

僕は急に紫里の携帯電話を覗いて見たくなった。

メールとかの盗み見ではなく、あくまで僕と紫里の写真が彼女の携帯電話の中でどう存在しているのか気になったのだ。

そして彼女と話しながら、僕の興味は膨らんでいた。

紫里がトイレに立ったのを機に、僕は紫里の携帯電話に手を伸ばした。

## 【7】ゆるる衝動（後書き）

次は……

時間があれば、明日かその次の日にはUPいたします。

## 【8】覗き見

僕はテーブルに手を伸ばして紫里の携帯に触れた。彼女はたった今、トイレに立って席を外したのだ。

テーブルに無防備に残された携帯電話。

僕は彼女の携帯に触れた瞬間躊躇して、指先に力をこめる。

チラリと視線を移すと、トイレの在る奥の角に、紫里の後姿が消えるところだった。

二つ離れた席から、高らかな笑い声が聞こえる。

穏やかに自由な空間が、一瞬で冷たく硬直する気がした。

僕は周囲の目を気にして周りを覗いた。

みんな自分たちの話しに夢中で、他人の事など見ていない。

……大丈夫だ。だれも俺を見ていたりしない。

他人の携帯を覗こうとする、不道德な自分に誰も気付いていない。

彼女の携帯電話を掴んで素早く自分の胸元に引き寄せて開く。

プリクラ同様によく撮る僕や二人の写メは、この中に入っているのか？ 僕はなんだかよく判らない不安を抱きながらメモリーの中を探った。

幸いメーカーが同じ機種だから、操作は僕の携帯電話とさほど変わらなかった。

真っ先に画像フォルダを覗くが、友人らしき画像が数点と住宅街の片隅で撮ったらしい犬や猫の写真が数点。

どのカメラアングルも犬や猫と同じ目線の高さなのが紫里らしい。この時点で特に焦りはなかった。

大切な画像は、メモリーカードに保存する事も多い。

僕は迅速にメモリーカードにアクセスしてピクチャーフォルダを開く。

何も無い……いや、紫里の友達らしき女の子の画像が数点ある。

紫里と一緒に撮った物もあった。

僕は紫里の隣で微笑む彼女を何処かで見た気がした。

同じ年にも見え、どこか幼くも見える。ただ、特徴的違いから姉妹ではないと思う。

ふと思いついた……デジカメより荒い画面がぼやけて蘇える。

それは、紫里の手帳の隅に唯一貼られていたプリクラの娘だ。

しかし何故、僕の写真が無い？

昨日撮った画像は何処に行った？ それとも、毎日小まめにパソコンに保存するのか？

いや、それでも携帯メモリの中の画像をいちいち消去はしない。付き合っている最中なら、なおさらだ。

普通は彼氏の画像は持ち歩くのが自然だろう。

僕は思案を巡らせるのは後にして携帯を閉じると、寸分たりとも狂うことが無いようにテーブルの上にそれを置いた。

途絶えていた喧騒が、再び耳に蘇える。

視線を上げると、ちょうど彼女の姿が店の奥から出て来た。

彼女は何時ものように笑顔を向けると、コーヒーを飲み干す僕に携帯カメラのレンズを無邪気に向けた。

紫里は二回シャッターを切って、ホクホクと微笑みながら携帯を閉じる。

「なあ……」僕は、言葉を吞み込む。

「なに？」

彼女の笑顔があまりにも無邪気だったから。

「そんなに写メとったら、直ぐにメモリーいっぱいになるんじゃない？」

「大丈夫だよ、いっぱいになったらパソコンに移しちゃうし、SDカードも予備があるから」

紫里はそう言いながら、氷の入った水を口に着けた。

「へえ、俺なんて付属で貰ったSDカードのまんまだぜ」

僕は無理に彼女の話しの流れに乗り、笑って見せる。  
心の中で不完全に燻った小さな疑惑の火種を、自分の手でそつともみ消した。

窓の外は初夏の匂いを漂わせる蒼穹そらが何処までも続いて、萌黄色に霞んでいた。

【5月16日22..45】

.....

彼女の携帯電話に僕の画像は無かった。

散々撮っている僕の画像、二人の写真は何処へ消えるのか。

本当にまめにパソコンへ保存しているのかもしれない。

彼女の性格だと、それも充分考えられなくも無いのだが。

それでも僕は、なんだか解らない不安に囚われる。

## 【9】メモリー画像

週明け、僕は学校内で工業化学科の美咲を探していた。

学食で見つけたが、他の女友達がいたので仕方なくその場は見過ごし、その日を終えてしまう。

その次の火曜日、三時間目の授業が終わった休み時間に学食でパンを齧っていると、パタパタと美咲の方が近づいて来て僕の隣の席にペタリと座った。

工業高校の上履きは、運動靴以外に実習用としてサンダルが用意されている。

どうして実習用がサンダルなのかは謎なのだが、そのアバウトな履き心地に、誰もが次第にサンダルの方を常用するようになる。

だから、余計に足音はパタパタする。

そしてウチの学校は、三時間目と四時間目の間に何故か二十分の少し長い休み時間が在るのだ。

弁当を持参していながら、この時間にパンを買ったり、うどんやラーメンをすする連中も多い。

美咲は機嫌よさげに「元気？」と僕に声をかけて、

「ねえねえ、硯<sup>すずり</sup>って石で出来てるって知ってた？」

「みんな知ってるっての。だいたい漢字が石片<sup>いしへん</sup>だら」などと、少しの間くだらない会話を続ける。

しかし、頭の中は他の事でイッパイだ。

そして僕は彼女に訊きたかった事を切り出す。

「美咲、けっこう彼氏と一緒に写メとか撮る？」

「うん。撮るよ」

「プリクラは？」

「プリクラも撮るよ」

美咲は少しだけマスカラの着いた睫毛を瞬きさせた。

「パソコンに画像移したりする？」



「パソコン？」

美咲は怪訝な顔をして、手にしていた携帯を閉じる。

僕は口に入っていたパンを飲み込んだ。

「メモリーイッパイになったら、やっぱパソコンに移すだろ？」

「うん……」

彼女は首を傾げて、学食のプレハブ鉄骨の天井を見上げる。

「メモリーイッパイにならないよ。あたしの2ギガだよ」

「いや、何ギガだっていずれイッパイになるだろ」

「そうかな？」

「なるって」

「そんなには撮らないよ」

「でも、音楽サイトからもダウンロードとかするだろ？」

「ああ、そう言えば、前の1ギガのメモリーはイッパイになった」

美咲は自分の腰掛けている丸椅子を傾けて、ゆらゆらと揺すった。

「イッパイになってるじゃん」

「でも、パソコンには移してないよ。面倒じゃん」

「そうか？」

「あたしは面倒だから、すぐに別のメモリーカード買っちゃう。メモリーごと保存しとけば、それでいいじゃん」

美咲はまだ手付かずの僕のイチゴオレのパックをさり気なく開けてストローをさすと、「あっ」という僕の声が届く間も無くそれを口にくわえた。

彼女はすぼめた口をモゴモゴさせて、喉を鳴らしている。

「美味しい」

僕はわざと手元にあったグラスを鷺掴みにして水を飲む。

「タダだから、よけいに美味いんだろ」

「うん。ゴチ」

美咲は目尻を下げて笑った。

僕が彼女に確認したかったのは、女子が自分の携帯画像をマメに

パソコンなんか保存するかという事だ。

やっぱり僕が思っていた通り、普通はそんな事はしない。

もちろん、何かで使うものならPCに取り込むだろうが、美咲もしたように撮った写真は他の誰かに見せたくないものだ。

パソコンにコピーしても、よほどの事がない限り携帯の画像は消さないだろう。

「彼氏の画像って、何時まで持ってる？」

僕の質問に、美咲は再び怪訝な顔をする。

「はあ？ 何時までって？」

「どのくらい経ったら消す？」

「消さないよ」

彼女はイチゴオレを口から吹き出しそうになって、思わず手で口をふさぐ。

「だって、付き合ってる彼氏の画像は普通消さないっしょ」

「そ、そうだよな。普通消さないよな」

美咲は頭もいいが、勘もイイ。

学食の窓から裏庭に架かる校舎の影を見つめると、再び僕を見て

「どうしたの？ 哲、もしかして彼女に写メ消されたとか？」

僕は少しだけ言いよどんだが

「いや、彼女に言わせるとパソコンに移してるらしいんだけど……」

僕は大雑把に、凄く大雑把に彼女の携帯の中に、何度もとった僕の写真が無い事を伝えた。

美咲は啞えていたストローを口からこぼして

「彼女の携帯覗いたの？」

いや……問題はそこじゃないんだが……

「どうしても気になって、少しだけな」

「サイテイ」

美咲は冷ややかに悪戯な笑顔で言う

「でもさ、それってヤバくない？」

「ヤバイって、何が？ 携帯覗いたのが？」

彼女は「ううん」と首をブンブンと振り

「だって、普通彼氏の画像は持ってるって。古いものだって別れるまで消さないよ」

「いや、俺も妙だとは思ってるんだけど……」

「彼女、消すって？」

美咲の顔が僅かに哀れみを零す。

「ああ……」

僕は急に頼りない声で頷いた。

「哲の彼女、好聖館でしょ？　なんか訳ありなんじゃないの？」

「訳ありって？」

「わかんないけどさ」

彼女は哀れみを隠すように悪戯に微笑むと、再びストローを咥える。

僕は頷きもせず美咲の口元を見つめ、手に持っていたパンの最後の一切れを口へ放り込んだ。

【5月27日PM22.. 48】

.....

僕は再び困惑している。

彼女の真意が解らないのだ。

女は何を考えているか解らないというけど、それとは違う気がする。

何かもつと深い、探り当てられない深く拠所無い理由が在るかもしれない。

僕はその暗黒に包まれた不安に恐怖しながら、彼女の前で笑顔でいることに疲れている。

もちろん、ただの思い過ごしかもしれないが……  
高校生とはまったく、以外に疲れる職業なのかもしれない。

## 【10】河口へ

街の中央を流れる本流の河川は、大きく曲がりくねって河口へ流れ込む。

河口から1キロほど上流には二つの橋がかかり、上流側のより大きな橋の袂には、夏になると毎年打ち上げ花火の発射台が造られる。二つの橋の中間に位置する場所には貸ボート屋が在って、日差しが暖かくなると休日には意外に混み合う。

もちろん、冬は閑古鳥が鳴いているけれど。

水辺に行きたいと言ったのは、紫里の方だった。

僕はボートなど小さい頃に一度漕いだだけだが、彼女に引っぱられて川辺に来てしまった。

「大丈夫でしょ？」

「いや、どうかな……」

「大丈夫、ボートがひっくり返ってもあたし、泳ぎ得意だから」

紫里はそう言って笑うけれど、僕はあまり泳ぎが得意ではない。

カナヅチと言うほどではないが、服を着たまま河で泳げる自信ではない。

川辺に突き出た栈橋と、そこに横付けされた黄色いボートが漣に揺らいでいた。

足を踏み出すと体が揺れる。

紫里は高揚した笑いを惜しげもなく発する。

スーツを着たおじさんと、奥さんにしては若く娘にしては不自然な二人組みがボートで出てゆくとこころだった。

真っ黒に日焼けしたおじさんが、愛想よく空きボートに促す。

「白渡橋しらとの向こうには、行かんでくれよ。あの先は河口に向う流れが急で、手漕ぎでは戻って来れんから」

僕らは深いシワの刻まれた真っ黒な笑顔に見送られて、棧橋を離れた。

見様見真似でゆっくりとオールをこいでみる。

ボートが水面を滑り出す。

「スゴイ、スゴイよ。ちゃんと動いてるじゃん」

紫里は水面に手を伸ばすと、指先を川面に向ってパタパタと動かす。

僕はなんだか重く感じるオールで手がイッパイな感じがし

「そうか？」

と辺りを見渡す。

日曜と言う事もあり、そこいらじゅうに楽しげなカップルの姿が浮かんでいる。

中には二人並んでオールを一本づつ仲良く担当しているカップルもいるが、紫里はとりあえずオールを持つ気はないらしい。

褐色に濁った運河の水も、太陽の陽を浴びた中で漂うと、何だか清々しく思えるから不思議だ。

ここそこで魚が跳ねる。

「見て見て、さかな！」

紫里はチャポンと水面に波紋が出来るたびに、高揚した声を上げた。

まあ……たまにはいいか。

僕は彼女の高揚感に合わせる素振りで、笑顔を向けながら重いオールを漕ぐ。

内心はオールを漕ぐだけでいっぱいなんだけど……

ぐるりと大きく弧を描いて方向転換すると、オールがやたら重かった理由が判明した。

流れに逆らって進んでいたのだ。

河の緩い流れに沿って進むオールはやけに軽くて、ひと漕ぎですいぶんと進む気がする。

「なんか、早くなったね」

「流れに沿ってるからだよ」

「ああ、そっか。こっちの方が楽でしょ」

紫里はボートの縁から顔を突き出して、ボートが切る僅かな波を見つめた。

「でも、戻る時が大変そうだけど」

「あたしも手伝おうか？」

紫里は冗談半分で笑うと、ストローのトートバッグから、いつの間にも買ったのかペットボトルのジュースを取り出す。

「少し休もうよ」

二つのボトルを掲げて「どっち飲む？」

ラズベリーの果実入りミネラルウォーターと、ウーロン茶。

「紫里は？」

「じゃあ、あたしウーロンで」

彼女は手を伸ばしてラズベリードリンクを僕に渡す。

オールを止めると、ボートはゆっくりと惰性で漂う。

僕がラズベリードリンクを飲んだ時、紫里は携帯カメラのシャッターを切った。

日差しが途切れて川面に漣が立つと、素肌に冷んやりとした風を感じる。

僕は膝を着いて、紫里に迫ると手首を取った。

彼女は片手に携帯電話を持ったまま、沈黙して僕を見つめていた。鼓膜の奥で漣の音がサラサラと聞こえる。

僕が紫里の手首を引き寄せると、彼女は力なく前に倒れるように膝を着く。

と、同時に俯いた。

「ご、ごめんなさい。まだ……もう少し待って」

その言葉の意味を僕は問わなかった。

僕は漣の音に誘われて、彼女の唇を狙っていた。

「そ、そうだね。まだ、だよな」

照れ隠しに、妙に声が大きくなる。

「ごめん……」

彼女は俯いたまま小さな声で言うと、上目遣いに僕を見上げる。

「ほ、ほら。ここ、周りから丸見えじゃん」

「そ、そうだよな」

本当は、大きな橋げたの影に入って、周囲からは死角になっていた。

だから僕は、彼女に迫ったのだ。

それでも僕は、彼女が否定してくる気はしていた。

今までも身体が触れる度にチャンスは覗いていたのだけど、どうも踏ん切りがつかなかった。

直ぐに身体が触れ合う気安さとは裏腹に、微妙な拒みの空気が彼女の何処かから漂っているのだ。

それでも通り過ぎる漣の音が、いま、何となく僕の衝動を沸かしていた。

再びギラつく日差しが僕達を照らす。

目を細めて空を見上げたとき、僕はボート屋のおじさんの言葉を思い出す。

この橋を越えると戻れない……。

「ヤバイ、紫里。こっち来い」

「えっ、だって……」

「バカ、違うよ。漕ぐの手伝え。ここから先は流れが速くなるから戻れなくなるぞ」

紫里もボート屋のおじさんの言葉を思い出したらしく

「あっ！」

と声を上げて僕の隣に腰掛ける。

「でもあたし、ボートなんて漕いだ事ないよ」

僕は身振り手振りで漕ぎ方を教えるが、紫里はなかなか上手く水をかけないようだった。

それでも僕達は必死でオールを漕ぐ。

その時潜り抜けた橋は、既に30メートルほど後方に在った。



紫里の漕ぐ力が小さいから、方向転換はすぐに出来た。

しかし、橋は少しずつ確実に遠ざかっている。

僕達は河の流れに負け、後ろ向きに河口に向って進んでいた。

船首に背中を向けているので、霞む流れの先が大きく開けているのが見える。

河口だ。

別に滝が待ち構えているわけじゃないから、そのまま流されても海へ出るだけなのに、僕らは完全に焦りに飲み込まれていた。

それも、さっきの気まずい空気をかき消すにはちょうどいいのだけれど。

僕達の船は結局、救助に来たモーターボートに引かれて、河をゆつくりと上って貸しボート屋の船着場へ無事戻る事ができた。

穂のかに甘酸っぱいような不思議なスリルに満ちたひと時を、僕達は素肌の腕が触れ合う中で堪能した気がする。

それが楽しいのか苦痛なのか、僕は困惑するのだ。

【6月1日 pm 23 .. 56】

.....

人の思考と言うのは判らない物だ。

ただ、それが自分の予想していた悪い方向へ動いていると感じるとき、行動は消極的になる。

この日々は続くのだろうか……。

明日は筋肉痛か。



**【11】疑惑の壁（前書き）**

## 【11】疑惑の壁

並木の青葉を通り抜けた日差しが歩道にチラチラと揺れている。

夏服のブラウスにかかる木の葉の影が、ふたりの歩調に合わせて漣さざなみのようにゆっくりと流れていた。

「紫里、お前何か企んでるだろ？」

僕は彼女の艶やかに揺れる後ろ髪を間近で見つめながら言った。

真正面から紫里の視線を受けながら切り出す勇気などない。

あの真っ直ぐな眼差しで見つめられたら、今日までの全てを瓦解させる言葉など言えなくなってしまう。

「えっ？」

紫里はゆるりと笑みを零して振り返った。

僕の言った言葉を、何か聞き違えたと言う顔だった。

「お前、俺を好きじゃないだろ？」

心苦しかった……

こんな事を切り出す自分は愚かだと思う。

……今のまま時が流れれば、それはそれでいいではないか。別に彼女と一生を共にするわけじゃない。

難しい事など考えず、今が楽しければいいじゃないか。

しかし、不に落ちない疑念が僕の心を常に揺さぶる。

もちろん笑って済む結果を、僕は望んでいた。

「どうしたの？ 急に」

紫里の笑みは揺ぎ無かった。

「俺の写真、どうしてるんだ？」

僕は余計な話しにならないように、彼女の笑顔に惑わされないように、出来るだけ率直に焦点のブレを防いで話題を進める。

「だ、だから、家のパソコンに……」

「それでも普通は、携帯にも画像を残すだろ？ それとも、俺と付

き合ってる事は、周囲の誰にもヒミツなのか？」

「携帯見たの？」

しまったと思った。

「ああ……ゴメン……」

でも僕は真意を確かめたい。

「でも気になるんだ。何かがおかしいだろ？ 携帯を覗いたのは謝るよ……画像フォルダ意外は見えてないから」

紫里は歩道の並木に目を逸らす。

涼しげな瞳が、睫毛の奥で揺らいでいた。

彼女の白い頬に木陰が注いで、木の葉が風で揺れると彼女の頬で白い光が揺れた。

「そんな事ないよ。だけど……」

紫里は言い淀んだ。

眉間にシワを寄せて俯く彼女の顔を見るのは心苦しかった。

紫里のその顔は、困っているというよりも悲愁に満ちていた。

「じゃあ、これから紫里の家に行こう」

「えっ？」

僕は心の何処かで、本当に彼女がパソコンに僕の写真を山ほど貯蔵している事を願っていた。

それなら後は笑い話になるだけで、何も追求する必要も無くなる。疑った事をひたすら謝ればいい。

しかし、彼女の返事は口ごもる。紫里の唇が小さく震えた。

「ダメ？ これからじゃ……」

紫里は一度僕を見上げたが、再び俯いた。

何時ものように僕の視線に彼女の視線が入ってこない。

鋭いほどに煌く彼女の瞳は、僕を見ていなかった。

紫里は少し考えていた。

僅かな時間が、とてつもなく長く感じる。

木の葉のすれる音が、うるさく感じた。

電線にカラスが二羽並んで止まっていたが、何かを思い出したか

のように飛び立ってゆく。

誰かが時間は不変ではないと言っていた。

置かれた環境によって時間の長さは変わるのだという。

在る時の一分間は別の三分間になり、また在るときは十秒ほどに変わる。

存在する居場所によって、時間の長さと言うのは常に変動するのだ。

ただ、時計の刻む時間の流れは常に不変だから、人はそれを明確に気付く事はできない。

「いいよ……行こう、あたしの家に……」

紫里は俯いたまま言った。

地面を見つめる決意の眼差しが、心苦しい。

僕は彼女を無理やり犯してしまったような罪悪感に駆られた。

それほどに、紫里の表情は苦悩に満ちた物だった。

それでも僕は、それが何故なのか別の疑問が沸きあがって、心のどこかで「やっぱいいよ」と言いたい気持ちを抑える。

紫里が静かに歩き出すと、僕は無言で彼女の後について行った。

僕は高校に入って一年生の頃、学校まで自転車で行っていた。川沿いの道をひと駅分走ると通えない距離ではない。

しかし、二年の中頃からは電車で行くようになる。

一番近い駅までは自転車で行くが、そこからひと駅電車に乗るのだ。ちやうど、紫里と出逢った駅がそうだ。

彼女の通う好聖館高校は駅向こうに在るのだ。

僕が何故わざわざ電車に乗るのかと言うと、学校帰りに繁華街に出易いからだ。

繁華街は最寄の駅から学校とは逆方向に二駅行く。

これまた頑張れば自転車でも行けるし、現に一年の頃は頻繁に自転車で行ったものだ。

しかしやはり帰りがかったるい。

幸彦はまだ帰りはひと駅近いのだが、僕は四駅分もフラフラと帰ってこなくてはいけない。遊んだ余韻も吹き飛んでしまう。

電車賃がかさみそうだが、行きはそっち方面へ帰る誰かの自転車に乗っけてもらおうと言う荒業を使うから平気だ。

紫里の家は、僕が自転車で学校へ向う時に通る川沿いの道を入った閑静な住宅街にあった。

線路と河川に挟まれる新興住宅街だ。

公園や緑地も多く、瀟洒な洋風の家も多く建ち並んでいる。

レンガ造りのカフェの手前で、紫里は立ち止まった。

ずっと無言で歩いていた彼女は、静かに腕を前方に突き出して指差す。

「そこ？」

僕はレンガ作りのカフェを見つめる。

階段で少し高くなった敷地には、オープンカフェ風にテーブルや椅子も並んでいる。

近所の主婦らしき連中が三人、テーブルを囲んで何かを話していた。

角地にあたるその斜向かいには噴水の在る小さな石畳の公園が見えて、小さな子供連れの母親が何人かくつろいでいた。

目の前の建物を見上げる。

白い建物は三階建てで、住居スペースは二階から上にあるらしい。

紫里は僕を見上げると小さく笑って、再び歩き出した。

それは初めて見る、淋しそうな愁いに満ちた笑顔。

## 【11】疑惑の壁（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

内容は、いよいよ本題に入ります。

それがおもしろいかどうかは、解りませんが…（苦笑）。



## 【12】別れと始まり

「な、なんだよコレ……」

紫里が自分の部屋のドアを開けた時、僕は思わず声に出した。

飛び込んできた白い壁、その空間に置かれた不可解な存在に息を呑んだ。

彼女の家は外から見てとれた通り、二階から住居になっていて、石畳の綺麗な階段を登って玄関に入ると、キッチンや浴室もすべて二階に位置していた。

リビングから浴室へ続く廊下の途中に下り階段があって、店のバックヤードへも家の中から通じている様子だった。

下り階段と少し位置のずれた場所には上に向う階段。

その階段を上ると直ぐに洗面所があって、廊下の角を曲がって紫里の部屋があった。

彼女は覚悟を決めたようにゆっくりとドアノブを廻す。

南向きの大きな窓から日差しがたつぷりと降り注いでいた。

外観的デザインの影響だろう。南東の角は内側に入りくんだ作りで、そこにも小さな窓がある。

南東の出窓際には備え付けの棚があって、ドアの横からは大きなクローゼットの扉が続いている。おそらくウォーキングクローゼットだろう。

部屋に入った瞬間、女性独特のファンデーションとミースの混ざった甘ったるい匂いが嗅覚をくすぐる。

それは不快なものではなく、些細な緊張が解ける。

しかし僕にはそんな香りを堪能している暇は無かった。

視線が捉えたモノを理解する事に、脳内思考の殆どを注いだから。「お前、ここで何してる？」

僕の声は微かに震えていた。

彼女に促されて、僕は小さなローテーブルの間に腰を下ろすと雑にあぐらをかく。

「ちよっと待っててね、何か飲み物もって来るから」

紫里はそう言って、ドアを開け放したまま部屋を出て行った。

彼女の部屋は女の子らしく片付けられていた。

ベッドカバーに朝の寝起きの乱れはなく、綺麗に整えられている。フローリングの床は艶やかで、中央に敷かれた大きな犬のキャラクターが刺繍されたセンターラグにも誇りや髪の毛ひとつない。

しかし……。

雑に組んだあぐらは、落ち着き無く揺れた。

座った位置から首を伸ばして、再び不可解なモノを眺める。

学習机の上に置かれたノートパソコンと、その横にある木製のアンティーク調ラックに置かれたマルチプリンタ。

その周辺には見覚えのない奇妙なプリクラ写真に似たものが幾つも散乱していて、僕の目をクギ付けにする。

僕の画像の横には知らない娘が仲良く映っている。

それは僕が参加して撮ったものではない。おそらくPCソフトを使って加工し自作したものだ。

そのレパトリーは様々で、今まで撮った数々の僕の写真が使われ、見知らぬ少女の隣で笑っている。

いや、僕の横で微笑む彼女は見た事がある。

何処で見たのか、ほんの少しぼんやりと僕は考えた。

天井には埋め込み式の照明器具、部屋の角にはスポット照明までついていた。

僕はプリクラの少女を思い出す。

紫里の手帳に唯一貼られていたプリクラの娘だ。そして、紫里の携帯の画像フォルダに唯一在った写メの画像でもあった。

友達……なのだろう。しかし何故？

僕はその先が考えられず、想像できず、微かに脅えていた。  
想像を絶する事に、人は恐怖するのだ。

それがどんなに可愛らしく自分を見つめる女子高生だろうと、想像できない行動を目の当たりにすれば、やはり気味が悪い。

少しして部屋に戻って来た紫里は、アンティーク調のカップに入ったカプチーノを二つ、テーブルに置いた。

香ばしい香りが部屋を満たす。

「冷たいほうがよかった？」

「いや……どっちでも」

まるで初対面のような、気まずい空気が部屋を包み込む。

「引くよね……」

彼女は静かに言った。

ここへ辿り着くまでに何度か見た、やっぱり揺らめくような悲しげな笑みを浮かべる。

「いや……」

僕は紫里の潔けつさに、言葉が出ない。

好聖館だから、変わり者でも仕方ないのか？

しかし、やっぱり納得できない。

「あれ、何？」

僕はプリンタの用紙排出トレイに乗ったままのプリクラもどき写真を指差す。

「プリクラ造ってるの……」

「それは判るけどさ……」

紫里自身と僕とのものだったら、何となく判る。

まだ理解できる。

彼女が僕との空想の世界を堪能しているのかもしれないから。

そのぐらゐの変わり者なら、苦笑混じりで共感もできるだろう。

しかし、どうして僕の知らない娘と僕を合成させたプリクラ写真を作る必要があるのか？

「でも、何で？ あれ誰？」

僕は困惑を隠せずに苦笑する。

苦笑する以外の表情は思い浮かばなかった。

どんな表情をしていいのか判らなかった。

強く軽蔑しているわけでもなく、彼女の行為に絶望したわけでもない。ただ、何となく気味が悪かった。

しかし、彼女は別に僕をストーキングしていたわけではない。

この数ヶ月間ちゃんと付き合ってきたのだ。

それなのに、彼女の自作しているプリクラには紫里の姿は無い。

「友達……」

紫里は何時に無く短い言葉で応える。

「友達って？」

「ご、ごめんね……」

紫里は俯いたまま言った。

「意味わかんねえよ」

僕は彼女の「ごめんね」を自分なりに理解しようとした。

結論……私はあなたの事を好きではありません。

僕にはそう聞こえた。声が苛立つ。

「なんで、こんな事？」

「あの娘は、つきしまうさみ月島兎瞳。あたしの親友」

「だから？」

「彼女はあなたが好きです」

僕は紫里の言った言葉を自分の頭の中で整理した。

「俺を好きなのは、その月島って娘なの？」

紫里はコクリと小さく頷いた。

「じゃあ、どうして彼女が俺の前に来ないんだ？　なんでお前がそこそ俺の写真なんか収集してるんだ？」

僕の声が少し荒々しくなって、紫里の全てを突き放した。

「どうしてお前が俺と付き合ってるんだ？」

「彼女は……うさみ兎瞳は会えないのよ」

会えないという言葉の意味を、僕は短い時間で咄嗟に考えた。

「死んだ……とか？」

紫里は僕の言葉に小さくかぶりを振る。

黒髪がスローモーションのように、左右に揺れる。

「じゃあ、どうして？ 紫里が橋渡しをするのは判らないでもないけど、どうしてデートまで演じるんだ？ どうして俺と付き合うフリとかするんだ？」

紫里はゆっくりと言葉を選ぶように、テーブルのカップを見つめて口を開いた。

「兎瞳は外に出られないの。いえ、正確に言うと日差しの下に出られない」

まるでドラキュラだ……そんな人間がいるものか。

「日差しの下に出られない？」

僕は困惑して彼女を見つめるが、紫里は表情を変えない。

明るい笑みではなく、終始淀んだ、そのくせ涼しげに小さく微笑んでいる。

棚の上に乗ったオルゴール時計が音を奏でた。

作者は知らないが、楽曲名は知っている。あまりにもこの場に似合いすぎる曲だと思った。

午後4時を告げる曲は、「別れの曲」だった。

### 【13】知らないカノジョ

春休みに出会って付き合いだした紫里は僕を騙していた。

それどころか、彼女は頻繁に撮った写メを利用してパソコンで別の誰かと一緒のプリクラ写真を製造していた。

その光景ははっきり言って気味が悪かった。

自分の顔が、誰か知らない女の子と並べられて小さな画面の中にいる。

一言では言えない複雑な理由がありそうだけど、単純に彼女の悪癖ではないかという不安も沸き起こる。

とにかく僕は気味が悪かった。

心の中で黒く淀んだ不安が、今までの思い出を呑み込む。

「兎<sup>うさみ</sup>瞳は生まれつき紫外線の下にはいられない体質なの。紫外線による細胞崩壊を自力で修復できないのよ」

「細胞崩壊？」

人間の表皮は日常の日差しで小さく崩壊する。

それらはその都度勝手に修復されて普通の人は何も感じないのだそう。

紫里は手元のカップを口に着けて、少しずつ話します。

視線はカップから離れない。

「彼女の家が哲の学校近くに在るのはホントよ。裏門の路地を挟んだ二階建ての家」

僕はよく裏門から出入りする。正門へ廻るよりも、僅かに昇降口までの距離が近いのだ。

そして、その裏門周辺の景色を思い出してみる。

路地の向い側には何軒か家が並んでいるが、兎瞳という娘がその何処に住んでいるかはもちろん想像がつかない。

「でも……じゃあ、彼女の変わりに紫里が俺とデートを？」

「うん……兎瞳に臨場感を味わって欲しかったし……」

「じゃあ、もしかして携帯電話に着けるストラップも？」

紫里は小さく頷く。

僕は数日前に彼女の携帯を見た時、ようやく僕とおそろで買ったストラップが無い事に気づいた。

美咲と学食で話した日だ。

「いくら友達の為だって、普通そんな事するか？　ありえねえ。意味わかんねえ。普通じゃねえよ」

紫里は応えなかった。

「俺にウソついてまで、そんな事してどうなる？　何の意味があるんだよ」

空想のプリクラで恋愛を疑似体験できもんか。

「お前ら、おかしいんじゃないのか？」

僕の声は大きくなって、深く静まった部屋に響いた。

彼女は唇を歪めて、顎の先に梅干の種のようなシワを小さく作った。

「意味はあるのよ……」

紫里は一度言葉を呑み込むと、言いたげな言葉を幾つも選び抜いているかのように、口を歪めてる。

「死ぬって決まってる兎瞳には、充分意味があるんだよ」

彼女の唇が小刻みに震えていた。

「死ぬ……？」

「同じ病気で苦しんでいる人は、成人する前に100パーセント死ぬわ」

俯いた紫里の睫毛の隙間から、ぽたぽたと素早く雫が零れ、テーブルを濡らした。

僕は瞬きをするのを忘れるほど、彼女を見つめていた。

成人する前に死ぬ？

それが決まっているという事は、いったいどういう事なのか実感

がない。

僕達はもう直ぐ十八歳だ。既に十八歳になってるクラスメイトもいる。

成人まであと二年もあると思っていたけれど、それが寿命の最大上限と言われると、その二年はあまりにも短い。

紫里の白い頬が、急に果敢なげに見えた。

ブラウスから伸びる白い首筋が愁いに光っている。

大きな窓が僕の後ろにあって、そこから西陽が注いでいるせいだ。「兎瞳は症状の悪化が極端に遅い方で、早い子供は小学生頃には精神の崩壊が始まって間も無く死んでしまうの……」

「精神の崩壊？」

「紫外線に触れないと、人間は精神安定に欠かせない物質を体内で作れなくなつて、心が不安定になるの……最近兎瞳も……」

紫外線に触れない生活が精神を犯すなんて初めて聞いた。

——じゃあ、地底で暮らせないじゃん。

そんなどうでもいい理屈が僕の頭の中を駆け巡る。

「哲の事を何時も見ていた兎瞳は、何時もあなたと話がしたいって言ってた」

「別に会うくらい、いいぜ」

「さっき言ったでしょ。精神が不安定になってるって……もう普通には話せないのよ」

「普通に話せないって？」

「話題が行ったり来たりして、きっと哲はついていけないよ。もう、手遅れなのよ」

紫里は自分が言った「手遅れ」という言葉に、自分で反応した。肩が震え、再び涙が零れた。

日差しに光るそれは、星屑のようにテーブルに落ちて消える。

僕は何だか判らないまま、やっぱり彼女を見つめていた。

頭の中が混乱して、うまく思考が整理できない。

だって、精神に問題を抱えた人と話した経験が無いから想像がで



きない。

それは僕達が日頃罵倒する『バカ』とか『阿呆』とか、そんな上辺の滑稽な装いとは全く違うものだ。

命の灯火が消えるカウントに脅え、病魔に犯されてただ生きる少女の崩壊した精神など、僕には想像がつかない。

僕はただ夕陽が差し込む紫里の部屋で、言葉も無く、妙に艶やかなテーブルを見つめていた。

【6月7日PM23.. 21】

.....

驚愕を受けた。

今は動揺を抑えるので精一杯だ。

彼女は親友の為に僕と付き合っていた。

この複雑な理由について、ここで書くわけにはいかないのだが……。

とにかく僕の頭は混乱して……それでも彼女の親友を思う気持ちに僅かな感動さえ沸き起こる。

僕は騙されていたのに、それを罪に問う事ができない。

僕にもれっきとした良心が存在して、彼女とその友人である人を不憫に感じているのだ。

命に関わるウソなら、神様も許してくれるのだろうか。

## 【14】ハナミズ

僕は虚ろう日々の中を、ゆらゆらと漂う。

海原に浮遊するクリオネのように……心の中には何も無く、透明で……やっぱリクリネオそのものだ。

幸彦のバカ話も耳から入って頭の中を素通りする。

曖昧な相づちを打ち、適当に笑う。

気が付けば、頭の中に浮かんでいるのは苦悩に満ちた紫里の笑み。そして、月島兎瞳つきしまうさみという将来の閉ざされた同い年の少女。

僕は紫里に振られたのか、それとも兎瞳をふってしまったのか？

……僕にどうしろと言うのだろうか。

僕には何も出来ない。

紫里の助けになる事はできない。

僕は彼女の愁いな笑みの残像を無理やりかき消す。

なかなか消えない……。

古い商店街のシャッターは半分以上が締め切りで、小さなアーケード街は閑散としていた。

こんな場所も紫里と歩くと楽しかったのに、今は寂寥感せきりょうが僕を飲み込む。

放課後の街中をブラブラ歩くと、大きな運河の橋の上で足を止める。

歩道の上を、帰宅途中の学生たちが自転車で忙しなく行き交う。

ボートが流されるような河の流れも、上から見れば穏やかでそれを感じさせない。

疑問と不安を抱きながらもどこか浮き足立って送った日々は遠くへ霞む。

真実が疑問を消し去った瞬間に、高揚した時は消えた。

「トオルジャン」

聞き覚えのある声に、僕は欄干に寄りかかったまま振り返る。

「トオル、こんな所でナニシテルだお」

ルーシーだ。

水色のブラウスにかかるブロンドの髪は、まるでイギリス映画の主人公のようだ……ルーシーはオーストラリア人だけど。

そして、隣にもう一人。尚美と一緒にいた。

「ああ……」

僕は少々間拔けな声をだして微笑む。

紫里と一緒にいた時には考えられないような、弱々しい笑みだ。そんな心情を見透かされないように僕は先に言葉を発する。

「家、こっちなのか？」

ルーシーは橋の向こうから自転車で学校へ通っているそうだ。

「ソウだお。ナオミも一緒ナンだお」

間の抜けた語尾に、僕は再び笑う。今度はごく自然な笑みだった。「ルーシーも、手話できるのか？」

「ちよつとネ。あとは、フィーリングだお」

ルーシーはそう言って、一瞬ウインクした。クセなのか……？

尚美がルーシーに手話で何かを伝える。

彼女が相づちを打って「アア……ワタシも思ったヨ」僕は分けが判らず二人を眺めた。

「ユカリ、最近げんきナイだお」

ルーシーはいかにも悲しい表情をする「トオル、ナニかアツタカ？」

西洋人は表情が豊かだ。

「いや、別に……」

尚美も心配そうに僕を見つめた。

耳の聞こえない彼女には、僕の心の中が見えてしまいそうで怖かった。

「ユカリ、少し前からスゴクげんきにナッタヨ。ズット病氣ノ友だちに悩んでたヨ」

ルーシーは明るく笑って

「トオルに逢ってカラ、げんきにナッタだお」

ルーシーは、兎瞳の事を知っているらしい。

身近なごく普通のクラスメイトには話せなくても、異国の彼女には話せたのだろう。

「紫里は、トモダチ思い、だ、か、ら」

尚美が奇妙な声を出したのでビックリした。

——喋れるのか？

聴覚が不自由だと、喋れても正確な音や発音が難しい事は僕も知っていた。

ただ、間近でそれを聞くのは初めてだった。

「尚美、話せるの？」

「スコシネ。でも、ふだんは話さないだお。ハズカシイッテ」

ルーシーは尚美の脇腹を突いて「そんなの関係ナイだお」

尚美がビックリと身体をよじって笑う。

素朴で透明な微笑だ。

まだ高い西陽が、川面に反射して波が白く光っていた。

「ジャアネ、トオル。ユカリ、げんきづけてヤレだお」

二人は再び自転車に乗ると、ルーシーは僕にウインクを飛ばし、尚美は遠慮気味に小さく手を振って橋を渡って行った。

その先の交差点から消えるまで、二人の後ろ姿を僕は何となく見つめていた。

僕はなんてくだらない奴だ……。

出来ない事なんてない。

紫里の助けになるじゃないか。

たとえばそれが先へ続かなくても、今を助ける事は出来る。出来る気がしてきた。

一歩足を踏み出せば、きつと何かが見える。  
遠い先は見えないけれど、暗闇に白く光る道筋が微かに浮かび上がる。

その夜、僕は久しぶりに紫里の携帯に電話した。  
ディスプレイで僕の名前を確認したのか、電話に出た彼女の声は  
落ち込んでいた。

「この前は……ううん、今までゴメンね」  
もしもし、の後に発した紫里の言葉。

「いや、ちょっと……いや、かなりビックリした」

「ごめんなさい」

「でもさ……」

僕はその言葉を言っているのか躊躇した。

こんな事、本当に役立つのだろうか。

これがはたして二人の為になるのだろうか。

電話の向こうで、紫里の息を吸い込む音が聞こえた気がする。

「でもさ……会って見たいな……その娘」

紫里は一瞬無言になる。

息使いが聞こえた。

「どうして？」

「なんかさ、不思議じゃん。プリクラの隣で笑ってる娘を知らない  
っていうのもさ」

彼女が造ったプリクラは、近くでよく見ると合成した栄目が微かに  
わかる代物だった。

僕はおどける様に笑って「お前、合成下手だよな」

「だって、パソコン得意じゃないし……」

ズズッと鼻をすすする音が聞こえる。

微かな息使いは、口で呼吸しているのか。  
携帯を耳に押し当て、少しの心地よい沈黙を僕は堪能していた。  
ズズ……再び彼女が鼻をすすった。

## 【15】焦燥（前書き）

今回は紫里視点の一人称です。  
これからしばしば、話数によって挿入されます。

## 【15】焦燥

私は嘘をついた。

相川哲に嘘をついて、カノジョ宣言をしてしまった。

かけがえのない親友の為に、一世一代の大芝居をした。

彼は、いわゆるイケメンとかスポーツメンとかそんな男子とはかけ離れた存在で、これといった特長がない。

でも傍にいと、とても落ち着く……。

初めてでも昔から知っていたような快哉が沸き起こる。

——あたしがいきなり無邪気になれる相手は、今は彼だけかもしれない。

もつと一緒にいたい。

二人の時間を紡ぎたい……でもそれは、許されない事だと知っている。

「紫里、あたし好きな人できた」

ある日兎瞳が唐突に、そして無邪気に言った。

彼女の告白を聞いたのは去年の夏だった。

目が二重で少し茶髪で中肉中背……彼女の説明で彼を見つけるのは至難の技だった。

それでも密かに中学の知り合いを伝に、白鳳工業高校の情報を集めて回った。

判明したのは相川哲。

美術部なのに夏休みも午前中だけ部活をやっているらしく、平日の朝九時に何時も裏門に現れるというので、私は兎瞳の部屋の窓から一緒に観察した。

確かに……これと言って特徴はない。



何処にでもいる、高校生らしい高校生。

ちよつと茶色の髪は洗いざらして、遠慮気味に制服ズボンをズリ下げて、革靴のローファアの踵を潰している。

私は彼がどの駅から電車に乗ってくるのか調べた。

何の事はない、ひとつ隣の私が通っている高校の最寄駅だった。

彼はそこから電車でひと駅のこの学校へ通っているらしい。

定期が切れているのか、夏休中は自転車であっていたけれど。

兎瞳の精神が見るからに不安定になったのは一昨年十二月だった。

彼女の両親とも親しい私は、クリスマスのパーティーにお呼ばれた。

その夜、兎瞳はサンタクロースについて、急に熱弁しだした。

私はギャグだと思って笑った。

今までも話しの辻褄が合わない事はよくあって、絡まる糸を優しく解くように上手く受け答えした。

しかし彼女は急に怒り出して、サンタクロースについて尚も語り続ける。

私が彼女の矛盾に冗談交じりで反論すると、兎瞳はついに泣き出してしまった。

まるで幼い子供のように……。

かみ合わない会話はもう慣れていたが、彼女が怒る事は今まで無かった。

私は焦燥感と恐怖に駆られた。

彼女の命はもう長くはないと、その時私は実感したのかもしれない。

私が相川哲をターゲットとして、行動を探り出したのは年が明けて直ぐだった。

幸い去年のうちに彼女と別れている事も調べがついた。

誕生日、好きな食べ物、女性の好みや趣味や部活動。

私は彼の全てを探り出した。

実行に移そうと決めたのは三学期の期末試験が始める前だったけれど、何しろ私自身男子と付き合った経験が無かった。

何度もチャンス逃しているうちに、期末考査が終わって春休みに入ってしまった。

兎瞳は正常な思考が覚束おぼつかなくなっていた。

どうして陽の光あたらないと精神が崩壊するのか未だに私には判らない。

紫外線を避ける行為とは関係なく、紫外線に当たったときの免疫効果の欠損と関係が在るのかもしれない。

とにかく兎瞳の精神はどんどん危うくなって、会話が縦横無尽に動き回る。

そして、ごくたまに幼児解離してしまう事に驚愕した。

私は焦っていた。

兎瞳が二十歳まで生きられないと、彼女の母親に聞かされたのは中学二年の時だった。

落胆すると同時に何となく、その時はまだ時間はあると思っていた。

でも今は時間が無い。

数少ない同じ症例の患者の中で、多くの子供は高校生まで生きられないのだ。

いわば、兎瞳は長寿の部類に入る。

十七歳にして長寿……その歪んだ統計指数は私を果てしなく焦らせるのだ。



## 【16】 眞実の扉

次の金曜日、僕は放課後に紫里と待ち合わせをして、月島兎瞳つきしまうさみの家に向った。

彼女は病院に入院しているわけではなくて、命の危機にありながらも定期的に通院しているのみだと言う。

それはつまり、具体的な治療法が無いからに他ならない。

下校時間が一段落してひと気が引いた学校の裏門から、直ぐ傍の家並の一角に兎瞳の家はあった。

ごく普通の、なんの変哲もない二階建ての家屋は灰色のブロック塀と大小の庭木に囲まれていた。

白工の運動部が練習するかけ声や、野球部の金属バットの音が微かに響いてくる。

その度に僕は、だれか知り合いに見られる事を恐れて周囲を見渡した。

紫里は慣れた素振りですぐ玄関まで行くと、チャイムを鳴らす。

ゆつくりとドアが開き、小柄な中年女性が顔をだして笑顔をみせる。

「こんにちは、おばさん」

「あら、いらっしゃい」

親公認の親友である事が伺えた。

「今日は新しい友達連れてきたんですよ。といっても、兎瞳うさみは知ってるんですけど」

「あら、そうなの」

兎瞳うさみの母親はそう言って笑うと、訝しがるわけでもなく僕を玄関に通してくれた。

難病の娘をもつ母親として、予想外に明るい母ひとだった。

「さ、行こう」

紫里は遠慮もなく玄関を上がると、明るく笑って僕を二階へ続く

階段へ促す。

「じゃあ、後でおやつ持って行くわね」

下から明るく言った兎瞳の母親に紫里は

「はい。でも、お構いなく」

階段には嵌め殺しの大きな窓があつて、明かりを充分に取り入れていた。

三つ在るドアの左端に『USAMI』というウサギの形をした木製の札が掲げられている。

紫里は軽くドアをノックして「あたし、入るね」

そう言つて軽くドアを開けた。

病人の部屋とは思えない、やっぱり女の子特有の甘ったるい匂いが零れ出て僕の鼻孔に纏わり着く。

ズカズカと部屋に入る紫里の後から、僕は少し首をすぼめるようにして後を追つた。

「じゃじゃ〜ん」

紫里は両手を僕のほうに斜めに向けて延ばすと

「哲くん参上！」

おどけるように笑顔でそう言った。

僕はなんと挨拶すればいいのか戸惑つた。打ち合わせをしておくべきだった。

初めてだけど、初めてではない彼女に「始めまして」はおかしい気がする、僕は一瞬口ごもる。

紫里の肩越しに見える少女は、ベッドに身体を起こして蛇イチゴのような真っ赤な、小さな果実をプチプチと口に運んでいた。

「ひさしぶり、元気だった？」

こちらを向いた兎瞳の口から出た第一声だった。

僕は一瞬耳を疑つて、半口を開けたまま佇んでしまったが、慌てて顔に浮かぶ困惑を隠す。

紫里が僕の脇腹を肘で突く。

そうだ……僕と兎瞳は初対面なんかじゃないのだ。

いままで何度もデートを重ねて、一緒にプリクラを撮っている仲間のだ。

彼女にとってはおそらく……。

「あ、ああ。う、兎瞳も元気か？」

上々か？

僕は自分自身に問いかけた。

兎瞳はだいぶ小柄で、真っ白を通り越して青白い顔をしていた。けっして肌色ベースではない、別の何かで構成された色だ。

耳の隠れるショートカットは色素が薄い為なのか、ほんのりと茶色くて、小さな顔にクッキリと浮かぶ大きな瞳も薄い茶色をしている。

でも水晶のように透明な微笑みは明るくて、その無垢な笑顔に僕はつられるまま笑っていた。

兎瞳はガラスで出来た小さな小鉢をベッドの横に置く。

蛇イチゴのような果実が、ラズベリーだと気付く。

部屋の甘い香りは、この果実のせいだろうか。

「少し痩せた？」

兎瞳が言う。

「そ、そうかな？ あんまり自分では解らない」

初対面での会話ではなかった。

兎瞳は混乱しているのだろう。「原宿また行こう」とか、「あの映画また観たい」とか、紫里との想い出をすり替えた記憶で僕に話しかけた。

「ラッコ、可愛かったね。また行きたい」

「ああ、1匹増えたらしいよ」

「ホント？」

彼女の笑顔は、僕らと同一年には見えなかった。

もっと子供のように、もっと幼さに包まれて笑う。

事実を捻じ曲げた幻想と錯乱の想い出の中で……。

おそらく紫里は、僕と出かけるたびにその様子を彼女に一部始終

聞かせたのだろう。

カノジョとしてではなく、兎瞳と僕を傍観する友人として。

それは兎瞳の記憶の中で、僕との想い出に置き換えられるのだ。

僕は終始曖昧な笑顔できわめて曖昧に「ああ」と言う事しか出来ない。

紫里は咳き込むフリをして、零れそうな涙をそっと拭っていた。

「紫里、何処で哲くんに会ったの？」

兎瞳の問いは、おそらく今日どうして二人が一緒に来たかという事だった。

「うん、ほら哲くん学校そこだからさ、偶然兎瞳ん家の前で会ったのよ」

兎瞳の記憶回路は正常ではないのだ。

紫里はそれに対応したウソをつき続ける。

あちらこちらに飛び散るタンポポの種を捕獲するかのように、小さな矛盾の粒を的確に補正する。

真実の扉は開かない。

僕はといえば、できるだけ明るく笑顔でやっぱり「ああ」と言うばかりだった。

夕暮れが経ちこめる頃、僕と紫里は兎瞳の家を後にした。

「ありがとう」

「いや、いいけど」

二人はそれきり会話をせずに歩く。

なんだか心の中が、煙に包まれていた。

紫里も「これでいいのだろうか」という困惑に包まれた表情を微かに見せる。

僕はそれに気付かないフリをした。

夕陽の朱色に染まる西の空に比べ、暮色に変わり始めた東の空はまるでブルーベリーのような濃い紫色に滲んでいた。





## 【17】琥珀色の果て

それから僕は、週に2、3度兎瞳の家を訪れるようになった。

兎瞳うさみの母親は直ぐに僕を彼女の友人と認め、その都度ケーキやアイスやお菓子やジュースでもてなしてくれる。

紫里は「兎瞳の彼氏なのに、いつもあたしと一緒にじゃ変でしょ」といって、玄関先まで来ると踵を返す。

そして、暫く時間をずらしてから再びやってくるのだ。

ひとりで行くか悩んだ結果、兎瞳とふたりきりでは間が持たないからと、僕が提案した方法だ。

兎瞳は僕と行った事も無い場所や想い出を語り、僕はその度に紫里と出かけた時を思い出して「ああ」と曖昧に笑顔で返す。

奇妙だけれど、何だかその行為から抜け出せなくなっていた。

紫里が来るとホッとした。

彼女は前後左右に揺れる兎瞳の話しにうまく同調し、僕を交えて楽しい会話として構築するのが上手かった。

ある日僕達三人の前にココアビスケットと、大きなグラスに入ったコーラが出された。

兎瞳と紫里は、ほぼ同時にストローを加えると、ブクブクつと息を吹く。

二人は見つめ合ったまま、笑った。

水滴をおびたグラスの水がカラランと揺れる。

そうか……この行為は、二人の戯れの行為だったのだ。

もちろん、二人共炭酸を減らす為に吹いているのかも知れないけれど。

「また海行きたいね」

兎瞳が僕を見つめる。

閉じられたカーテンの向こうは、確かに海にでも行きたくなるような青空だ。

「え？ あ、ああ」

「今度はあたしもついて行っちゃおうかな」

「そうね、せっかくだから今度は三人で行きたいね」

自分が日中陽の光の下に出られない事は兎瞳も認識しているはずなのに、擬似的な想い出はそれを無視して出てくるのだ。

紫里と歩いた河口の砂浜が、彼女の記憶に入り込んでいるのか。

僕は兎瞳に話を合わせるよりも、紫里の瞳の奥に湧き出ては呑み込むように打ち消す涙が辛かった。

三人で写メをとり、そして真正銘合成でないプリクラ写真を紫里は自宅のパソコンで制作した。

出来上がったプリクラ写真の用紙の隅には、小さな水玉のシミが薄っすらと出来ていた。

それはきつと、紫里が零したものだと思う。

それは兎瞳の為に流したもののか、自分の為に流したもののか……。

僕達は何処に続くか判らない曖昧な友情と偽装された恋愛に包まれた鳥籠の中で、何時の間にかお互いの笑顔に共感し、励ましあっていたのだと思う。

光沢のある蒼穹色そらいろに湧き出るような白い雲は、太陽の陽を浴びて銀色に浮かんでいた。

飛行機雲が2本交差して十字を描く。

きつと僕達三人の気持ちは、何処までも交差しない。

三本は限りなく同じ方向に進んでるのだ。

その日は朝から落ち着かなかった。

自分の誕生日にこんなにも落ち着かないのは初めてだった。  
期末考査の帰り、紫里に電話で呼び出される。

「今日は、兎瞳は病院で検査だから……夜までかかるから」

「ああ」

待ち合わせの駅から、ぶらりと繁華街を通過って河川沿いの無駄に  
長細い公園を歩いた。

通りの向い側には、戦前から在るといふ白い教会の十字架が陽に  
照らされて黒く光っていた。

古びたベンチに腰掛けて日差しを受ける。

橋の上を制服姿の連中が行き交うのが見えた。

「これ……」

紫里は鞆から綺麗なりボンのかかった包みを取り出して僕に差し  
出す。

「兎瞳から」

「そう……」

「今日会えないのが残念だって言ってた」

思ったとおり、誕生日のプレゼントは兎瞳からだった。  
とうぜんだろう。

僕は兎瞳のカレシなのだ。

境界線のないぼやけた空間の中で、僕達は付き合っている。

紫里は僕にとってどういう位置にあるのだろう。

相変わらず目の前にいるはずの紫里が、なんだか遠い想い出のよ  
うで恋しく思う……。

「テストどう？」

紫里はベンチに座ったまま両脚を前に伸ばして、両手を膝に乘せ  
る。

「まあまあ、かな」

工業高校の試験は、普通科目が比較的簡単でらくだ。

技術系は興味のある事が多いから、それほど勉強しなくても勝手

に頭に入るし、元々知っている事もある。

「そっちは？」

「うん。まあまあ……かな」

紫里は前屈みになって僕を見上げるように笑う。

黒い髪の毛が太股にゆるりとかかかってサラサラと揺れた。

紫里は座りなおすと少し俯いて何かを考える。

公園に散歩に来た犬が、何かに向ってしきりに吼えていた。

「行こうか」

紫里は口角を上げる……すこし大人びた女の笑み。

僕達はゆっくりと来た道に戻った。

この時間が少しでも長く続くように……そう考えてしまっていたのは、きつと僕だけではない。

そう願いたい。

電車に乗って紫里の降りる駅に着いたとき、彼女は鞆から小さな包みを取り出した。

「コレは、あたしから」

彼女は押し付けるように素早くそれを僕に手渡すと、急いで電車を降った。

僕は口を開いて何かを言おうとしたけれど、紫里は既に駅のホームを小走りに駆けていた。

電車が走り出した時、遠くで振り返った紫里は小さく手を振る。

僕はドアの窓にヤモリの如くへばりついて、彼女の姿を見ていた。

まだ陽は充分高いのに、景色が琥珀色に霞んで見えた。

それは遠い昔に憧<sup>こが</sup>れた誰かの想い出写真のように、淡く滲んで薄れてゆく。



## 【18】重い日差し

期末考査が終わって夏休みに入った初日、僕は紫里にメールを送った。

ふと思いついたのだ。

兎瞳うさみは陽の光が無ければ外へ出られる……。

ネットで調べた兎瞳の症状に一番近かったのはXP症候群と呼ばれるものだったが、彼女の病気がそれかどうかは僕には解らない。

ただ、太陽の陽を浴びなければ外へ出る事は出来るはずだ。

だったら夜の街へ繰り出して、ホンモノのプリクラと一緒に撮ればいい。

おそらく僕は、兎瞳に何かしてあげたかったのだと思う。

偽善と言われてもいい。

世間なんてどうせ、学校の友人である幸彦や美咲でさえ、僕らの関係を知る由もないのだ。

しかし紫里の返信を見ると、僕は落胆した。兎瞳は精神的な崩壊から身体がいう事をきかなくなってきたらしい。

上手く歩けないという事だ。

何時もベッドの上にいるのは、そう言うことなのか。

それだけ身体のバランスが崩れるという事は深刻なのだ。

その後、直ぐに紫里から電話があった。

『でもそれ、いいかも』

「え？」

『プリクラ撮りに行こうよ』

「だって……どうやって？」

『あんたがおぶって行けばいいじゃん』

紫里はもっともらしく笑い声と共に言った。

彼女の声は、明るく弾んでいた。

朝から強い日差しが路面に白く照り返していた。  
翌日、部活のミーティングの為に僕は学校へ向う。  
秋の文化祭準備の為に会議だ。

と言っても、創作活動は二年が主体になる為、三年生は個人作品のみで夏休みの部活もない。

おそらく進学で夏期講習を受ける連中が出てくる為だ。

二年の意見に散々文句をとばし、三年の意見を二年が実行する計画になるのが例年の慣わしだ。

そんな調子で、午前中でミーティングは早々に終わる。

空の教室はどこも静まり返り、校舎の北側に位置する無人の廊下は少しだけ冷んやりする。

昇降口の手前、階段の踊場で保健講師の伊佐成翔子<sup>いざなししょうこ</sup>に会った。

彼女は本校で唯一、女性らしい女性講師と言ってもいいが、保健室に用のない健康児にとっては、時折姿を見かけるだけの無縁の人物だった。

「あの……」

すれ違いざまに、僕は思わず声をかける。

「ん？ なに？」

彼女は思いの外気さくに振り返って声を返してきた。

まる二年以上この学校に通って初めてまともに会話を交わす事に気付き、僕はその後の言葉を飲み込む。

「なに？ どうした？」

翔子は怪訝な笑顔で僕に歩み寄る。

栗色の長い髪がふわりと揺れた。

白衣を着ているのに、消毒液とかホルマリンとかの匂いは皆無で、ファンデーションの香りが微かに空気に漂う。

「具合でも悪い？」

「いや……ちょっと訊きたい事が」

「独身だけど、カレシはいるよ」

それってよく訊かれるのか？

「いや、そうじゃなくて……」

僕は喉の奥から言葉を搾り出す。

「XP症候群意外に、太陽の陽を浴びられない病気ってありますか？」

保健の講師は眉を潜めて、困ったというよりはどこか気の毒そうに僕を見つめた。

「そうねえ、最近は皮膚が炎症を起こす病気も在るらしいし。それぞれ紫外線に対するアレルギー反応らしいけど……」

彼女は片手を顎に当てると、僕を眺めた。

細い指先が折れ曲がる。

少し踵のあるサンダルを履いているので、視線が丁度僕と並んでいた。

「どうして急にそんなこと？」

「いや、なんとなく」

「他にもあるかもしれないけど、どれもまれな病気よね」

「精神を害する病気は？」

「そうね。XPは確かに精神障害が発祥するけど……調べてみようか？」

「いや、いいですよ。べつに……」

僕はきびすを返して足早に昇降口へ向う。

背中から伊佐成翔子いさなしょうこの視線が何処までも付いて来たけれど、それを無視するように僕は靴箱から取り出し外履きに履き替えてその場を去った。

薄暗い昇降口から外へ出ると、なんだか日差しに押し潰されそうで痛い。





私が兎瞳に逢ったのは小学校の3年生の時だった。

両親が日々忙しい私の家では、私は何時も一人だった。

姉妹でもいいれば、楽しくそれなりに子供だけの時間を堪能できたのだろうけど、ウチは一人っ子だ。

私が学校から帰ると、台所には何時もおやつのスウィーツが置いてあった。

何時の間にか私はそれを小さな箱に詰めて公園に行くようになる。ベンチに座って小さな子たちが遊ぶ風景を眺めながら、スウィーツを摘む。

自分が一人ではないと錯覚できる。

同じ空間には子供たちが戯れていた。

同じ年の子たちはあまり外では遊ばない。

家でパソコンをいじったり、既に塾へ通うクラスメイトもいたから、こうやって公園で戯れる友達を私は知らない。

それは小学校の中学年になって突然訪れたのだ。

その日私は不思議な光景を見た。

私が座るベンチからはブランコとその向こうにスベリ台。右側にはジャングルジムが在って、その向こうにもベンチがあった。

在る日の午後、そのベンチに私の視線はクギ付けになる。

——宇宙服？

私はそれが何なのか、自分の臆な知識の限りを尽くして考えた。

——宇宙人？ それはない。

見たままだった。

白っぽいロボットのような、宇宙服のような大そうな装いがベンチに腰掛けていた。

大きさは子供くらいに見える。

それとも、宇宙人だから小さいのだろうか？

ドキュメンタリー映画で観た近未来の潜水服にも見えた。

ヘルメットという感じではなくて、身体と顔と頭の部分は繋がったシルエットをしている。

顔の部分はガラスかなにか、透明の窓になっているが少し距離が在るためか周囲の景色が映り込んでその中は見えない。

私は些細な恐怖と好奇心で、それに近づいた。

それは少しだけ動いていた。あの大そうな服の中はどうなっているのだろう。

私は引き寄せられるように、ゆっくりと歩み寄った。

それが彼女との出会いだった。

彼女が着ていたのは紫外線を完全に遮る為の防護服だった。

高額な為、成長する度にサイズを変更できず、中学に入ると見につける事は出来なくなった。

兎瞳は陽の光の下には出なくなった。

## 【18】重い日差し（後書き）

この作品はフィクションです。

作中に登場する病気は、XP症候群と直接結びつくものではありませんのでご了承ください。

## 【19】ラズベリー・フレンド

紫里と相談して、兎瞳を連れ出す事を決めた五日後の夕方、僕は彼女と二人で兎瞳の家に行った。

何時ものように紫里は外に留まり、僕だけが玄関へ行ってチャイムを鳴らす。

「あら、今日は珍しい時間ね」

兎瞳の母親は笑顔でそう言うのと、なんの躊躇もなく僕を招き入れる。

「もう直ぐ夕飯だから、ちょうどいいわ。一緒に食べましょう」

「あ、いえ僕は……」

僕は曖昧に笑った。

二階の兎瞳の部屋に一人で向うと、軽いノックの後に「俺」と言っ  
てドアを開ける。

この部屋に来たのはコレで6度目なので、もう大分慣れた。

が、僕は彼女の部屋に入って直ぐに困惑する。

兎瞳が何時のも兎瞳でなかったから。

「哲ちゃん」

兎瞳は僕の顔を見るなり半ベソでそう言った。

「あたしのケイタイ無いよ。哲ちゃんに貰ったケイタイ」

兎瞳はベッドから降りて、パジャマのまま絨毯じゅうたんの上を這いずり回っていた。

僕があげたのはケイタイではなく、ケイタイストラップなのだが……。

しかし、そんな事はどうでもいい。僕が驚いたのは、兎瞳の喋り  
があまりにも幼稚だったからだ。

僕を哲ちゃん呼び、ケイタイが無いくらいで半ベソをかいて床を  
這いずっている。

……どうということだ？

「哲ちゃんも探して。あたしのケイタイ」

「あ、ああ。大丈夫、どこかその辺にあるさ」

僕は兎瞳と一緒に床に膝を着いて辺りを探った。

枕元のちょうど下に当たるベッドの陰に、携帯電話は落ちていた。僕のモノとおそろいのストラップが着いている。

「これだろう」

僕が片手にケイタイを掲げると、兎瞳は涙目のまま無邪気に笑った。その無邪気さに、僕は恐怖する。

見つけたケイタイを開く兎瞳を横目に、僕は外にいらるであろう紫里に電話した。

『どうしたの？』

紫里は直ぐに電話に出た。コールの相手を液晶画面で見たのだから。

「兎瞳がちよっと変だぞ」

『どんなふうによ？』

「なんだか、幼稚園児みたいだ」

『ああ……』

紫里は溜息の混じった声を出す『出ちゃったんだ』

「なんだよ、それ？」

『時々幼児期に解離するのよ。滅多にないんだけど』

「じゃあ、今日は中止か？」

『でも、兎瞳は兎瞳なんだけど』

「幼稚園児の彼女を連れて歩くのか？」

紫里はほんの少し考えて『哲が決めて』と言った。

僕は携帯電話の画面と戯れる兎瞳をチラ見する。

紫里との電話はまだ繋がったままだった。

「判った、行こうぜ」

僕は兎瞳を連れ出す計画をそのまま実行する事に決める。

とりあえず兎瞳を着替えさせる必要がある。今の彼女が自分で着替えられる気がしない。

「兎瞳、着替えよう」

「なんで？」

「お出かけだよ」

僕は子供に言い聞かせるようにそう言いながら兎瞳のパジャマのボタンを外す。指先が微かに震えた。

子供の視線で僕の手を眺めると、兎瞳はニツと歯を見せて笑う。何故か犯罪を犯してる気分になる。

「何処行くの？ 哲ちゃん」

「いい所さ」

彼女の鎖骨はくっきりと白く浮き出て、その凹凸がなんだか痛々しい。

レースの着いた下着が眩しくて、僕は一瞬の罪悪感に包まれる。身体も小さく確かに痩せてるが、僕と同じ年の女性の身体に変わりは無いのだ。

その証拠に、彼女の身体から香る香氣においは、子供のそれとは違う女の匂いだ。

しかし、ポケットと小さな口を開けて僕の動作を見つめる彼女の瞳はあまりにも無垢で、男に服を脱がされたという恥辱は無い。

僕はクロゼットから淡い水色のワンピースを取り出すと、下着姿の兎瞳をただだけ見ないうちに彼女の頭から被せる。

「ズボン、脱げるな？」

兎瞳はコクリと頷いて、自分でパジャマのズボンを脱いだ。

僕はワンピースの衿に入り込んだ彼女の短い後ろ髪を手ですくい出す。

汗がでる……既に逃げ出したくなった。

僕の思考は迷走する。

本当にこの娘をつれて繁華街を歩くのか？ 大人とも子供ともいえない精神崩壊寸前のこの娘が、僕らの手に負えるのだろうか。

僕のことをどう思っているのか？ 幼なじみか、幼稚園の友達か……？

僕は逃げ出したい気持ちを抑えて、その時を待った。



兎瞳の家に初めて遊びに行ったのは小学校四年の春だった。

彼女の部屋の窓は日中でもカーテンで遮られて、蛍光灯が燈っていた。

家の中も出来るだけ日差しを遮る為に雨戸などを閉めているから薄暗い。

でも私は、その奇妙な家が好きだった。

なんだかヒミツの隠れ家に案内されたようで、ドキドキした。

兎瞳は真っ赤なラズベリーを口に入れて微笑むと、私を部屋へ招き入れた。

この頃の彼女は、家の中を自由に歩き回る事が出来た。

私よりは少しおっとりした動作だったけど、気にはならなかった。

一度行くと、私は頻繁に兎瞳の家に行くようになった。

家にも独りぼっちだけど、兎瞳の家に行けば一人じゃないから。

彼女は何時も真っ赤なラズベリーを食べていた。

頬をぷくぷくとさせながら、赤い果実を口へ運ぶ。

何故か年中彼女の家にはラズベリーがあっただけど、ハウスモノとかが在るかは判らない……。

兎瞳は私にとって親友であり、妹のような存在だった。

でも、寂しさを癒してもらうのは、何時も私の方だったと思う。

しかし兎瞳は、中学になると少しずつ会話がかみ合わなくなり、足腰も自由に動かなくなっていた。

私は学校へ通いながら、放課後に彼女と会うことばかり考えていた。

毎日ではないけれど、週に何度か私は兎瞳を訪ねた。

本当は毎日行きたかったけど、中学生なりにそれは迷惑かも知れないと考えていた。

多少かみ合わない話も直ぐに苦にならなくなった。

でも成人まで生きられないと、彼女の両親から聞かされて、それを知ったとき私は、兎瞳の前で不覚にも涙を流してしまった。

何故私が泣くのか解らない彼女は「大丈夫だよ」と言って、私の頭を優しく撫でてくれた。

嗚咽が漏れて、よけいに涙が止まらなかった。

今までに無い焦燥と苦悩を強いられて、家に帰ってからは親に聞こえないように布団に頭を突っ込んで夜通し泣いた。

それ以来、私は兎瞳がこの世からいなくなる日まで、泣かない事を心に誓った。



## 【19】ラズベリー・フレンド（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

最終話まで毎日更新できると思います。

深夜が無理な時は、朝になると思います（^^；

## 【20】夜の街

僕はこの家の電話が鳴るのを合図に、兎瞳をおぶって彼女の部屋を出る。そういう計画だ。

「哲ちゃん、どこ行くの？」

「楽しい所に行こう。俺と一緒に行くの嫌かい？」

背中に負ぶさった兎瞳はブンブンと首を振る。

恐怖を感じるほど、彼女の身体は重さを感じない。

「行く。哲ちゃんと一緒に行く」

僕は静かに部屋のドアを閉めると、音を立てないように階段をつま先で下りた。

兎瞳は軽かった。背中に微かな重量しか感じないのは、それだけ痩せて肉が無くなってきているのだろう。

僕の首に廻されたか細い腕の手首がやたら骨ばっていた。

紫里は今頃適当に話を延ばしているはずだ。

僕は気配を消して玄関のドアに手をかける。

ダイニングから夕飯の匂いと共に、兎瞳の母親の声が聞こえる。

「行って来ます」僕は心の中で呟いて外へ出ると、音を立てずに玄関ドアを閉めた。

通りへ出ると、紫里がまだ電話で話していた。

僕と兎瞳の姿を見ると、そそくさと話を切り上げて電話を終わらせる。

「成功だね」

「ああ」

僕達三人は、準備していた自転車に乗って路地を駆け出す。僕の後ろに横乗りさせた兎瞳は、足をブラブラさせながら楽しそうに笑っていた。

僕らは地元で一番大きなゲーセンに出向くと、次々に最新のプリ

クラ機器の前に立った。

ほとんど歩けないはずの兎瞳は、ヨタつきながらも自分の力で歩いた。

幼児性に解離した精神が、上手く身体を動かしていたのかもしれない。

兎瞳の無邪気さは子供そのもので、その姿は滑稽で切なくて、果敢なくて……そして何故か愛おしくて……。

僕は彼女の頭をグリグリと撫でたり、頬がくっつくほど顔を寄せてプリクラを撮影した。

紫里は時折気を利かせて三人の輪から抜けると、僕と兎瞳が撮る姿を眺めて優しく微笑んだ。

その間も兎瞳の家から何度も紫里の携帯に着信があったのを、僕は知らないでいた。

ぼくらは夜の街を通り抜けて、マックで夕飯を食べて、再び自転車に乗って兎瞳を送り届ける。

夏の夜風が、おがくずのような匂いを何処からか運んできた。

線路に沿った道を走っていると、民家の間に小さな畑が見える。

僕は何気なくそのキャベツ畑に視線が行った。昔はあちこちに空き地や畑が在ったのもだけど、最近は大分少なくなった。

すると、キャベツ畑の中で何かが動いた。

月影はほの暗く夜の景色を照らし、近くの街路灯の明かりも畑に届いていた。

僕はキキッと自転車を止める。

背中に兎瞳の身体が当たった。

「どうしたの？」

紫里も自転車を止めた。

「何かいるぞ」

僕はキャベツ畑を指差す。

「猫じゃない？」

紫里がそう言った時、その言葉の誤りにぼくらは気づいた。

薄闇に並んだキャベツの隙間から長い耳が黒い影となってヒョコヒョコと見えたのだ。

「ウサギ？」 紫里が呟く。

「ウサギだ」

僕は兎瞳を乗せた自転車を置いて、畑に駆け寄る。もちろん忍び足で。

兎瞳は畑を見つめたまま、じっと瞳を凝らして

「ウサギ見たい！」

紫里は兎瞳を連れて、僕の後ろからゆっくりと近づいて来た。

そっと首を伸ばして畑を見渡すと、人の気配を感じたのかキャベツ畑の先客はゴソゴソとうごめいた。

僕が畑に一步足を踏み入れると、ウサギはピョンと勢いよく跳んだ。

やっぱりウサギだ。

僕はキャベツを跳び越えてウサギを追った。

「紫里、そっち」

僕が指差すと、紫里は兎瞳から手を放して、僕とは反対側から畑に入る。

「マジ、ウサギ！」

紫里が高揚した声を上げる。

しかし、ぴゅーっと紫里の足の間をウサギはもの凄いスピードで跳び抜けた。

「ぎゃっ」

「バカっ！」

「だって、速すぎだよ！」

僕と紫里は位置を入れ替えるように再び両脇からウサギを追いつめる。

月影に照らされたウサギの鼻が、ピクピクと脈動するように動いていた。

二人に挟まれたウサギは、行き場を失って立ち止まった。  
が、次の瞬間僕と紫里の手の届かぬ方向へ大きくジャンプしたのだ。

「あっ」

「ちっ」

二人が目で追った先には兎瞳が膝を着いていた。ウサギは何を血迷ったのか彼女の胸元に飛び込んだのだ。

兎瞳はビックリした拍子にウサギを両腕で抱きとめる。

偶然とまぐれが重なる神業的な奇跡だった。

「やった!」

紫里も僕も思わず叫んだ。

兎瞳は驚いた顔を、直ぐに笑顔に変え瞳をランランと輝かせる。

「ウサギだ」

「そうだよ。よかったね兎瞳」

紫里が近づいてウサギを覗き込む。

黒々とした大きな目を輝かせるこげ茶色の迷い仔は、おそらく野ウサギだ。

「何処から来たのかな?」

「さあね」

僕も兎瞳の胸元を覗き込む。

鼻がピクピクとスゴイスピードで動いていた。

背中の柔らかそうな毛が、ふわりとうごめく。

すると、兎瞳はぱっと腕をといでウサギを地面に放った。

凄いスピードで跳ねるウサギは、三步跳びほどで僕達の視界から消えたように見えた。

「あっ」

僕も紫里も思わず無念の声を上げるが、兎瞳は故意にウサギを放したのだ。

「なんで?」紫里は言った。

「心臓が凄くドキドキしてた……」

「心臓が？」

「うん。脅えてたよ。かわいそうだから……」

兎瞳は悲しそうな顔でそう言う

「怖いのは嫌でしょ。ウサギも嫌だよ」

そう言っただけで笑った。

月影に白い歯が見える。

「そうだな」

僕は腰に手を当てて、キャベツ畑を見つめた。

紫里は兎瞳の膝小僧に着いた土をほろろと畑を見渡して

「哲……キャベツ踏んだでしょ」

「お、俺か？」

「あたし踏んでないよ」

確かに見渡せば、畑のキャベツは幾つか潰れて、土はあちこち荒れていた。

帰り際、兎瞳は一度だけ我に帰ったように呟いた。

「哲ちゃん……死ぬって、どんなだろうね」

僕はギョツとして振り返るが、そこにいるのは足をブラブラさせる幼女の兎瞳が、風に髪を靡かせるだけだった。

玄関から出て来た兎瞳の母親は、僕達に怒ってはいなかった。

ただ小さな涙を浮かべて兎瞳を抱きしめると

「もう黙って連れ出したりしないでね」と言った。

「疲れた？」

帰りの道で紫里が言った。

僕達はずっと黙ったまま自転車を押して歩いていた。

「いや、別に」

僕はそう言いながらも、少し疲れた笑顔を紫里に向ける。

兎瞳に疲れたのではない。  
彼女を見守る自分の姿に、いや、紫里の姿に疲れたのかもしれない。

## 【21】ブルーベリー&ラズベリー

五日後、月島兎瞳はこの世を去った。

あの日の翌日目を覚ますと、彼女は元通り十七歳の少し崩れた少女に戻っていたらしい。

その四日後の朝、静かに眠るように彼女はこの世に別れを告げたそうだ。

僕は紫里からの連絡でそれを知ったが、ついこの間一緒に笑顔を交わした人間がこの世に存在しない事実を実感できなかった。

僕と兎瞳の関係は……いったいなんなのだろう。

彼女にとって僕は、本当に大切なひとだったのだろうか。

僕は通夜に行くべきなのだろうか。葬儀に参列するべき人物なのだろうか。

結局僕はその晩、制服を着込んで弔問に出かけた。

入りづらかったら家の前で引き返せばいい。そんな気持ちで出かけた。

しかし、月島家は思いの外しんと静まり返っていた。

月の光が照らしだす薄闇の中、喪中の行燈がぼんやりと浮かんで静寂を満たしている。

普通、学生が他界すればクラスメイトが沢山弔問に訪れるだろう。担任教師や校長や、塾の講師やバイト先の友達や……。

でも、兎瞳にはクラスメイトも担任教師もない。いるのは小学からの親友である紫里だけだった。

両親の知り合い関係らしき数名は出入りするものの、こう言っってはなんだけど通夜独特のひと気というか喧騒いそがしというか、そう言うものが全く無かった。

その喧騒は普通、故人への家族の悲しみを一時でも救いさなってくれる物だと思う。それがないと、ただ悲しみだけが充満して息苦しくな



るのだ。

「来てくれたんだ」

門扉の所で暫く躊躇している僕に、敷地の中から声をかけてくれたのは兎瞳の母親だった。

僕は静かに促されるまま、家の中へ入り弔問する。

綺麗な顔をしていた。

死に装束と言うのだろうか。

兎瞳は綺麗で、まるで眠りについたお姫様のように棺の中に横たわっていた。

それは僕にとっても、紫里にとっても僅かながら救われる事だったに違いない。

供物の中に、彼女が好きだった真っ赤なラズベリーの山があった。艶やかに紅く、それはルビーのようにひと際輝いていた。

紫里は俯いたまま、涙も枯れたように部屋の隅に座っていた。

まるで人形に取って代わってしまったかのように、正座をしたまま俯いた前髪が顔を覆って動かない。

焼香の香りに眠る、疲れ果てた旅人のような彼女に、僕は声をかけられなかった。

翌々日に、火葬の為僕は再び月島家へ出向いた。

梅雨の最中とは思えない、暑い日差しが注いでいた。

斎場へ彼女を運ぶ車の装飾が、陽を浴びてキラキラと光っていた。

陽の光に向かって真っ直ぐに、彼女は昇る。

彼女はようやく思う存分蒼天を駆け抜けることができたに違いない。

「大丈夫？」

三日間の葬儀が全て終わった夕刻、月島家を出ると僕は紫里に声をかけた。

最後までいたのは僅かな親戚と僕達だけだった。

「兎瞳は淋しかったんだよ」

「ああ……」

「もっとみんなと遊びたかったと思う」

「ああ」

紫里はただ呟くように言った。

僕は同じ応えを繰り返すしか思いつかなくて、ゆっくりと紫里の足取りに歩みを合わせるのが精一杯だった。

彼女が何かを言う度に、兎瞳の幼い笑顔が脳裏に浮かんた。

「でも……楽しかったね」

「ん？」

「ゲーセンとか、ウサギ追っかけたりとか」

「そうだな。楽しかった」

紫里は相変わらず俯いたまま「ありがとう、哲」

「なにが？」

「あたしのウソに付き合ってくれて」

「別に……俺も楽しかった」

少しの沈黙が、風を誘う。

僕は自然に頭に浮かんだ言葉を発した。

「あれはウソじゃないよ」

紫里は無言で顔をこちらに向けた。

「兎瞳にとっては、全てが事実なんだろう」

彼女にとって、どれだけつじつまが合わなくとも、どれだけ矛盾が生じようとも、兎瞳自身が信じることはすべて本当の事なのだ。

その中で彼女は生きていたのだから。

「そうだね」紫里はようやく小さな笑みを作ってみせた。

果敢なげで弱々しい笑みだったけど。

兎瞳を連れて家を抜け出した夜、きっと僕達は世界で一番特別な

関係になったような気がする。

想いを寄せ合う三人が、それぞれに恋物語を演じていたのだ。

それがホンモノでなくても、その感覚、空気、息使いはホンモノだ。

けっして交わる事のない、恋物語。

それは風に吹かれるように流れ、ただ消えて行くだろう。

帰り道で兎瞳が突然呟いた「死ぬって、どんなだろうね」という言葉を思い出した。

僕にだけ囁いた彼女の心の叫び……自分なりの死に対する不安の声だったのだろうか。

彼女は、確かにそれを知っていたのだ。

僕達は国道に出る通りまで来ると、どちらとも無く立ち止まる。

夕暮れの中に、車のヘッドライトが流れてゆく。

何時の間にか頭上を黒い雲が覆っていた。

重く沈んだ黒雲の遙か先に、僅かな陽が沈もうとしている。

「哲、向こうだよね」

紫里が抑揚の無い声で呟くように言った。

「送るよ。家まで送る」

僕は紫里がどれ程ショックを受けているのか計り知れなくて、不安だった。

覚悟していた悲劇が訪れた時、人はこんなにも抜け殻のようになってしまうのか。

僕は紫里を促して、歩いた。

電車に乗ればいいのに、何故かそれが言い出せなくて彼女が向うまま歩いた。

白壁の三階建てが見えたとき、上空から雨音が落ちて来た。

それはあっという間に景色を黒く塗りつぶす。

僕は彼女を急かすように促すが、紫里は立ち止まって肩を震わせ

ると突然電柱の傍らにしゃがみ込んでしまった。

僕は一緒にかがんで彼女を抱きとめた。

彼女の濡れた背中が冷たい。

うう……えっう……と唸るような呑み込むような呻きを出して紫里は泣いた。

僕のシャツに彼女の涙がぽたぽたとシミを作って、雨の雫と同化する。

涙はどれほど流しても、決して枯れることはないらしい……。

僕が彼女の濡れ始めた髪の毛を撫でると、二人の頬がくっついていた。

生ぬるい液体で彼女の頬は熱く濡れている。

それが涙なのか雨なのかもう判らない。

親友を亡くした彼女が不憫だった。愛おしかった。

そのまま濡れた唇を合わせた。

紫里は僕にしがみつくように、<sup>すが</sup>縋るように僕の唇に吸い付いて、二人の舌が激しく、優しく絡み合う。

頬にはりついた髪の毛をそっと指で払う。

震えていた。

紫里の舌も唇も、頬も、肩も、腕も、足も……絶望と寂しさで全てが震えていた。

彼女の涙か唾液か鼻水か、あるいは雨水か判らない液体が口に流れ込んで、僕はそれを吸い上げるように飲み込む。

僕の背中にしがみ付いた彼女の指が食い込む。

少しだけ解った気がする。

彼女のオニキスのような、謎めいた無垢な瞳の輝き……それは、囚われの孤独、そして孤高……。

親友をなくす恐怖。

僕達が日頃下品なバカ話で盛り上がっている最中も、紫里はひとりでそれに立ち向かっていたのだ。

誰かが彼女の悲しみをくみ上げてやらなければいけないような気

がした。

それは彼女の家族でもなく、学校の友人でもなくて、僕なのだ。兎腫と共に時間を共有した僕の役目のような気がした。

「うう……ごめんね……」

「いいよ。べつに」

意味も解らず、紫里の声に応えていた。

きっと僕自身、今にも泣き出しそうな顔をしていたと思うけど、なんとか堪えた。

頬を伝っていたのは、たぶん空から落ちてきた雫だと思う。

雨は直ぐに小雨に変わった。

夏の夕闇に吹く風は、冷たく二人の肩先を掠めた。

僕の唇と舌先が、彼女のスベスベして濡れた頬の丸みを撫でる。紫里の顔は、なんだか甘酸っぱくてブルーベリーの味がした。

【7月16日AM2… 57】

……………

今日、いやもう昨日なのだが、僕は同い年の人の葬儀を経験した。葬儀に参列する事自体が初めてだった。

つい最近言葉を交わし、笑顔を交わした彼女は、もう呼吸もしないただの抜け殻と化していた。

それがなんだかとても不思議に思えて、僕は目頭を熱くする事さえ忘れていた気がする。

ただ言えることは……疲れた。

葬儀というのはあれほどにエネルギーを吸い取られるのか。

それとも、目の前の悲しみを乗り越える為に、あえて慌しく喧騒に満ちた静寂の行事として執り行うのだろうか。

途方も無く長いようで、あつけないほど短い三日間は終わった。  
疲れているはずなのに、眠れない……。。

## 【21】ブルーベリー&ラズベリー（後書き）

お読み頂き有難う御座います。  
次回最終話予定です。

## 【22】最終話―エピローグ

蒼い天空に浮かぶ太陽の光は、アスファルトを白く照りつける。  
鬱屈した心を熱い風が吹き抜ける度に、視界に映る並木の木洩れ  
日が幻夢にゆれていた。

僕はあれから紫里とは逢っていない。

兎瞳の葬儀の帰り、彼女を抱きしめたのが最後だ。

海の日、家出をしていた母親が帰ってきた。何食わぬ顔で、前  
と変わりなく台所に立って夕飯の仕度をしていた。

その翌日、試験休みが終わって終業式の為学校に行った。

僕は兎瞳の家を見るのが辛くて、少し遠回りして正門から学校内  
へ入る。

あの家屋を見ると、心がひび割れをおこしそうで怖かった。

兎瞳を亡くした紫里を思う事が辛かった。

「裏の家のあの娘、死んだんだってな」

教室へ入ると、隅で誰かの声が聞こえた。僕に言ったのではない。

「ああ、なんか精神病の女だろ」

クラスでも目立たない部類の板倉と斉藤が珍しく声を大きくして  
話していた。

「そうだったの？」

「狂って死んだらしいぜ」

後で気付いたのだが、学校裏の月島家に奇妙な少女が学校にも行  
かずに暮らしている事は、知る人ぞ知るミニ知識で通っていたらし  
い。

僕は駆け寄ってその会話の主である板倉を思い切り殴り倒した。

彼は後ろのロッカーに派手に身体を打ち付けて転げたが、僕を睨  
んだだけで反撃はしてこなかった。



自分の発した「狂って」という失言を理解していたのかもしれない。

それか、入学当初に上級生からカツアゲを受けていた彼を、僕が救ってやった恩を忘れていないのか。

どっちでもいいけど……。

その場から立ち去る僕を、教室に入って来たばかりの幸彦が声もかけられずに見ていた。

僕は右のこぶしに僅かな痛みを感じながら、彼の横をすり抜けて教室を出た。

それから本当の長い夏休みが始まった。

高校に入って彼女のいない夏休みは初めてで、僕は何をして過ごそうか正直途方に暮れた。

結局ただ流れる日々を消化してゆくしかない。

連日続く暑い日差しが頬に痛くて、紫外線の凶暴さを実感する。

幸彦は進学の為にゼミの夏期講習で忙しいらしいが、専門学校志望の僕には関係ない。

一度だけ駅のホームで紫里を見かけたけれど、僕は結局声をかけなかった。

長い黒髪とスカートの裾が、夏の風に煽られて静かに揺れていた。

紫里が水泳部を辞めたのはきつと、この夏を兎瞳と過ごす為だったのだと思う。

最後の夏になるであろう事は、長い付き合いの中で彼女自身が一番知っていたのだろう。

彼女は陽炎に揺られながら、上空を見上げていた。

白い月が浮かぶ青空の向こう……遠くの誰かを見つめて。

それは僕ではないだろう。

生前兎瞳が言っていた。

「あたしはきつと月から来たんだね。だから、月の光に照らされる

のは大丈夫だけど、太陽の光は浴びる事が出来ないんだね」  
そうかもしれない。

紫里はきつと、旻天に浮かぶ白い月の向こうに帰った親友を見て  
いるのだ。

僕達の恋愛ごっこは、兎瞳がいなくなった事で終わりを告げた。



兎瞳の目は正しかった。

純真無垢な彼女の感覚が発見した彼に私は惹かれた。

相川哲は兎瞳を受け入れた。彼女の心を受け入れた。

それは確固たる愛ではなかったかも知れないけれど、彼女を人と  
して愛してくれたのは確かだと思う。

彼の兎瞳を見つめる目は優しかった。

私を見る彼の目も充分に優しいけれど、彼女を見る目は仔兎を見  
つめるような優しさがあった。

私は時に、その眼差しに嫉妬しては、それをかき消した。

嫉妬の妖精ティンカーベルが心に舞い降りる度に、何度も追い払  
う。

羨んではいけない。兎瞳にはその資格があるのだ。

相川哲は兎瞳が発見した男なのだ。

私はそれを彼女の為に手探りで探し出しただけ……。

私はこの夏、二つの大切な物を同時に失った。

親友である月島兎瞳と、彼女の為に偽装カノジョを演じた相川哲。

私は何時の間にか……いや、最初にウソを並べてマックで会話を  
交わした時からきつと……。

兎瞳の為に取り込んだ感情は私の感情そのものと同化して、何時の間にか正三角形の愛情ベクトルを描いていたのだ。

でも……たぶん、もう哲には会わないと思う。

兎瞳がいなくなったらそうしようと決めていた。

兎瞳の為に付き合った男は、兎瞳と共に葬らなければならない。

兎瞳にとっての初めての男は、私にとっての初めての男。

それは、夏の夜に降る淡雪のように、一瞬で容かたちをなくして消える。

ある日兎瞳が私に言った。

「哲くんは、あたしの幻想なんだね」

「幻想じゃないよ。哲くんは兎瞳のカレシだよ」

私は身を乗り出していた。

「あたし、時々判るんだ……」

「時々？」

「うん。時々……でも、忘れちゃう」

兎瞳は肩をすくめて笑うと

「紫里も好き？」

私は困惑した。

兎瞳は再び「哲くん、好き？」

私は晴れやかに笑いを作る。

「兎瞳のカレシだもん。好きだよ」

「あたし、哲くんとキスしたのかな」

兎瞳の笑顔は困惑の迷走を繰り返す。

「したよ。カレシだもん」

私は躊躇なく言った。

「そう……」

「そうだよ。決まってるじゃん」

私は涙が零れそうなのを必死で堪えて、ニカッと笑う。

「紫里、こっち来て」

兎瞳に小さく手招きされて、私は彼女が半身を起こしているベッドの上に身を乗り出した。

彼女は私の唇に、キスをした。

軽く触れるだけの、冷たい感触だった。

私は驚いてその場から動けなかったけど、仰け反ったりしなくてよかった。

気持ち悪いとか、イヤダとかそんな感じじゃなくて、寧ろ心地よかった。

ラズベリーののような、穂のかに甘い香かおり気がした。

彼女はきつと、私が哲に心を奪われている事を知っていたのだと思う。

目まぐるしく日々錯乱する思考の中で、当たり前のように気付いていたのだ。

私達はお互いの心を見透かしながら、優しさのオブラートでお互いを包み合っていた。

時にそれはふたりを切なくさせたけれど、そうしてゆくしか一緒にいる術がない事をお互いに知っていたのだと思う。

その二日後、彼女は静かに旅立った。

私は葬儀の終わった夜、哲と最後の別れを済ませて家に帰ると、夏期講習の申し込みの事を無理に考えたりした。

年明けには大学受験が待っている。後期の申し込みなら、まだ間に合うだろう。

お風呂の湯船に浸かりながら、そればかり考えた。

それでも勝手に頬を涙が伝う。

頬を伝った熱い液体は、熱い湯船に落ちて同化する。

堪えきれなくなって、浴槽に浸かったまま声を押し殺して泣いた。

走馬灯のように兎瞳が、哲が私の心を支配する。

声が零れそうで、両手で顔を覆ったけれど、それでも嗚咽が止まらなかった。

浴室に響く自分の声を聞いたら、いつそう我慢できなくなった。湯船に顔の半分をつけると嗚咽の響きは収まったけど、息が零れるたびに湯面がブクブクと泡立った。

夜風に木々の葉が擦れ、虫が鳴いていた。

囁くような透明で悲しい声が、窓ガラスをそっと震わせた。

ブクブクっと、再び湯面に泡が立つ……。

## 【エピローグ】

携帯が鳴った。

『よお、俺』

幸彦だった。

『塾のゼミで、教室は違うんだけどさ、好聖館の娘と仲良くなってさ。ちよっと変わった娘なんだけど』

「そりゃ、よかったな」

僕は笑顔を作って、明るい声を発する。

『お前、手話とかできる？』

「できねえよ。何だよそれ」

『じゃあ、彼女は？』

「彼女？」

『好聖館の』

幸彦は僕らの事を知らない。

尋常を越えた三人の戯れも、その一人がいなくなったことも。

「ああ、もう逢ってないんだ」

『はあ？　なんだよ』

「わりいな。じゃあ頑張れ」

僕は明るい声とは裏腹に躊躇なく、プチッと通話を切った。

夕間暮れ、僕はひとり運河にかかる橋の歩道で足を止める。

川面を抜けた夕涼みの風が、思いの外心地よかった。

長いと思っていた夏休みも、半分を消化してしまう。

こうして有耶無耶うやむやに僕達の時間は去ってゆくのだ。

今朝、テレビのワイドショーで終戦記念日の式典のニュースをやっていた。

……そうか、今日は彼女の誕生日か。

紫里を思い出せば、兎瞳も思い出す。

あの二人は、僕の中で二人で一人なのだ。

まるで兎瞳の精神が獲りついたみたいに、僕の思考は錯乱する。

僕が付き合ったのは、はたして兎瞳なのか、紫里なのか……。

いや、僕は迷走にも似た二人の運命を、ただ傍観したに過ぎないのかもしれない。

甘く香るふたりの切なすぎるパトスを。

僕は橋の歩道から夕映えする夏空を仰いで、遠く果てしない紫色を見つめる。

蒼灰色に暮れたブルーベリーの空と、ラズベリーののような真っ赤な夕陽。

水門の周囲に生い茂った木々から、セミ時雨の喧騒が風に流れていた。

携帯電話に着いたストラップを徐に外して、淀んだ運河に投げ込

む。

濁った川面は夕陽を浴びて、ゆらゆらと燃えるように紅く輝いていた。

毛糸球でできた人型のそれは、ゆっくりと流れながら夕陽を照り返す濁った川面に沈んで、あつと言う間に見えなくなった。

【8月15日PM23.. 36】

.....

突然ですが、このブログは本日をもって終わりにしたいと思います。

願わくば、ごくありふれた恋愛模様をここに綴りたかったのですが、この5ヶ月間は僕にとって二度と訪れない忘れ得ない貴重な体験だったと思います。

もうここにログインする事は無いでしょう。

でも、もしかして……大人になったいつか、ふと思い出して覗く日がくるかもしれません。

その時大人の僕は、何を思うのでしょうか。

いままで観覧していただいた皆様に感謝いたします。

— 敬具 —

【  
E  
N  
D  
】



## 【22】最終話―エピローグ（後書き）

最後までお付き合いいただき有難う御座います。

今回は1人称入れ替えや、ブログなど今まで使っていない手法で描いてみました。

少しでも読んでいただいた方に、感謝いたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6654e/>

---

ブルーベリー&ラズベリー(Blueberry&Raspberry)

2010年10月8日13時05分発行